室町時代の文芸

岩橋小弥太

國史研究會編輯　岩波講座　日本歴史

室町時代の文藝

岩橋小彌太

岩波書店

室町時代の文藝

岩橋小彌太

目次

前書き

こゝで室町時代といふのは、いつからいつまでをいふのか。文藝上の機運は何年何月からどうなつたといふ風に、明な區切りを付けて動いて行くものでないから、かういふ時代區劃の細い穿鑿は不必要の樣だけれども、併し世間では足利尊氏が勢力を得て、幕府を開いてから後の時代を室町時代といふ人と、兩朝御合體から後の時代を呼ぶ人との兩方ある樣であり、或は一人の學者が時によつてどちらをも御都合次第に使つてゐる事もある樣である。此の間約五十年の差異があるが、今日の樣な急テムポの時勢でなかつたから、此の五十年はそれ程大きく見る必要はないのかも知れない。時代の大勢は吉野朝時代と兩朝御合體の以後とはきはやかな區別が付けられない。政治史では之を區別する事が必要であるが、文藝の上では寧ろ區別しない方がよいかと思ふ。そこで本講の室町時代といふのは、鎌倉時代に直ぐ續いて行くのである。又此の時代の終りには戰國時代といつて特に區別する事もある。政治の上では織田信長が勢力を得てからを安土時代といひ、天正十年に豐臣秀吉が、信長の後を承けて實權を握つてからを桃山時代といつて區別してゐるが、文藝の上では、これも亦殊更に區別する必要を認めない。更に大まかな見方をすると、文藝史上の室町時代は、其の以前の鎌倉時代と、格別に違つた色彩を有つてゐない。中世などゝいつて、此の兩時代を一つに

くるめて見る方が都合のいゝ事が多いのである。足利尊氏は元弘三年に京都の兩六波羅を沒落せしめるや否や、幕府を開く用意をしてゐる。そして延元元年に幕府を開いてから、先づ第一に鎌倉幕府時代の諸人の舊領を安堵するといつてゐる。足利氏の幕府はつまり鎌倉の幕府の延長なのであつた。時人は足利氏に對して、北條氏の事を先代といつて區別したが、幕府の制度は先代のまゝで、實務を擔當する奉行人なども、多く昔の家筋の人が當つてゐた。かういふ風に幕府の制度が同じであつたばかりでなく、時勢も大體同じ樣子であつた。

併しかういふ內にも、室町時代は鎌倉時代に較べると全體の調子が概してだらけてゐる。第一に幕府の基礎からが非常に脆弱で、其の最盛ともいはるべき應永から嘉吉に至る頃でも、幕府の威信は完全に行はれない。幕府の命令は地方に居る守護代達が遵行しない。土民百姓は又守護代達に對捍する。これが所謂下剋上の世相である。かういふ樣子が應仁以後になると一層甚しくなり、殊に將軍義熈が近江の鈎の陣中に薨去してから後は、幕府は殆ど無いも同樣である。諸國の守護は守護代、又代に勢力を奪はれてしまひ、或は土民に攻められて滅びてしまひ、鎌倉時代以降權勢を握つてゐた公武社寺の舊勢力も競うて極度に困憊し、或は沒落して、諸國に新勢力が勃興し、愈戰國の時代となつた。かういふ風に第一に政治が無氣力であつたから、從つて社會全體が引き締らない、遂に所謂亂世になつてしまつた。文化の發展がかゝる時代に於いて華々しい活氣を呈し得ないのは當然である。そして文藝は文化の花であり、又文化の潤色である。されば此の時代に文藝の花が爛漫と咲き亂れ得ないこと、絢爛たる色彩を呈し得ないことも亦當然であらう。足利時代は文藝の暗黑時代であるとは屢聞く所であるが、それは如何にも尤もな次第である。唯暗黑といつても眞ツ暗闇といふのではなく、美しい姿が窺はれないだけの事なので、かういふ間にも文藝が全く無かつた

のではない。古い社會組織が當代に至つて、愈行詰つて遂に打破せられた樣に、文藝も平安朝以來の傳統がとう〲持ち切れなくなつて滅びてしまつて、そして新しい社會組織と新しい文藝とは次の時代にならなければ興らなかつたのである。さりながら次の時代の文藝の萌芽はやはり又此の時代にあるのである。當代の文藝を概評すると、全體に小規模で、且つ平板で、而も粗野である。當代の作品で、永く後世まで生命のあるものは殆どない。唯歴史物語、軍記物の内に大いに談ずるに足るものゝあるのは頗る意を強くするのみであり、又文藝の形式、例へば連歌の如き、或は能樂や曲舞などの如き、獨り此の時代のみに榮えて、他の時代には殆ど類を求め得ないものがあつて、大いに當代文藝史を飾り得ようと思ふばかりである。

二　歌道

此の時代の和歌は殆ど語るに足らない、和歌史上最もつまらない時代であらう。此の時代には和歌はなく、唯歌學寧ろ歌道のみがあつたといつてよからう。

和歌は鎌倉時代の初めになつて、技巧の山を登り詰めてしまつて、もう行く道が無くなつてしまつた。これから坂を下るばかりである。此の頂上にあつて最も活躍したのは御子左家の俊成と其の子定家とであつた。俊成は後白河法皇の勅命を奉じて千載和歌集を撰し、定家は後鳥羽上皇の新古今和歌集の勅撰に參與し、更に後堀河天皇の勅旨を拜して、新勅撰和歌集を撰定したから、此の三代の勅撰に參與した父子の歌壇に於ける勢力は、牢固として抜くべから

ざるものとなつた。更に又定家の子爲家は後嵯峨上皇の勅命によつて續後撰和歌集を撰し、又續古今和歌集の勅撰にも參加したので、遂に御子左家は和歌の宗家の如き觀を呈するに至つたのである。其の子孫は代々和歌の宗匠として、又勅撰集の事にも與つたのであるが、實力のない宗家が其家道を維持しようとすれば、勢、華々しかつた父祖の跡を顧みながら、其の足跡を蹈みはづさない樣に努力するより他はない。これより御子左家の和歌、延いては鎌倉時代の和歌は、制の詞などゝいふ桎梏を設けて、唯如何にすれば疵の無い和歌が作れるかといふ事ばかりを念頭に置いて進んで行つたから、相率ゐて平板無味の和歌を作る樣になつた。爲家の子に爲氏、爲教、爲相等があり、爲氏を二條、爲教を京極、爲相を冷泉と稱し、兄弟互に其の勢力を爭つたのである。二條家は大覺寺統の皇室に用ひられ、爲氏は龜山上皇の勅を奉じて續拾遺和歌集を撰し、其の子爲世は後宇多上皇の勅を奉じて新後撰和歌集と續千載和歌集とを撰し、京極家では爲教の子毘沙門堂爲兼は持明院統に用ひられ、殊に伏見天皇の恩寵に浴し、玉葉和歌集を撰した。文藝の爭、歌道の論諍は世俗の權勢と結びつき、大覺寺統の皇統御登極遊ばさるれば、二條家歌壇に覇を唱へ、持明院統の皇統より御卽位遊ばさるれば、爲兼が出て支配し、互に血みどろの抗爭を續けたのである。此の兩家は各定家の歌道の正統を主張してゐるのであるが、二條家は保守的な、消極的な態度で、專ら家の庭訓を墨守し、爲兼は寧ろ積極的に、平板無味な體を憎つて、新鮮な風を唱へ、伏見天皇の御歌才と相俟つて、鎌倉時代末の和歌に稍華やかな色彩を添へた。二條家の爲世は專ら古歌の詞を採つて、それを綴り合せて歌に作り上げようとしたが、爲兼は直ちに古歌の精神を採らうとした。其の庶幾する所は古今集以前の古い歌、萬葉集の精神である。それ故持明院統の皇室に於かせられては萬葉集を尊重あらせられた樣に拜せられる。何事によらず革新はすべて復古の形をとるものであるが、

爲兼も亦古歌の精神を探つて、沈滯した當時の和歌を革新しようとしたのであつた。然るに爲兼は子孫が續かず、其の唱へた歌風は伏見天皇、後伏見天皇、花園天皇の御支持を受けたが、彼の亡き後は遂にそれを繼承するものが出なかつたのである。光嚴天皇は貞和二年に風雅和歌集を御自撰あらせられ、又毘沙門堂の風を御支持遊ばされたのであつたが、此の後は遂に其の風も華々しい發展を遂げるに至らず絶えてしまつた。

然るに大覺寺統の皇統では、爲世を寵せられた後宇多法皇の崩後、後醍醐天皇は直ちに勅撰集の編纂を思し立たゝせられたが、當時二條爲世はまだ在世中であつたのに、爲世の第二子爲藤に撰者を仰せつけられた。これは爲世が老年であるといふ理由で、撰者を其の子に讓つたといふのであるが、實は英明なる天皇が爲世の歌風に御滿足あらせられなかつたからで、爲藤は爲世の子ではあつたが、父の風を悅ばなかつたのである。されど撰集半にして爲藤は夭折し、其後を爲世の嫡孫爲定が繼いで撰定した。それが卽ち續後拾遺和歌集で、これも遂に當時の平板無味な歌風を脱する事が出來なかつた。併し天皇及び吉野朝の君臣は新葉和歌集に見える樣な悲壯な又意氣に滿ちた和歌を殘された。新葉集の撰者宗良親王は爲世の女爲子の所生で、和歌を爲定に學ばれたといはれてゐる。新葉集中には爲世及び爲定との御贈答が見えて居り、二條家の風を承けさせられたことは明であるが、天皇を始め皇族多く歌仙の玉質を稟けさせられたのと、四圍の環境とによつて、遂に鎌倉時代の末に將に消えんとしてゐた和歌の燈に、又一穗の光明を點ぜられたのである。新葉集は宗良親王が、皇室御南遷以後、勅撰の事なきを嘆かせられ、後醍醐、後村上、長慶三代の君臣の和歌を撰集せられたのを、弘和元年十月、長慶天皇から勅撰集に准ぜさせられたので、其の十二月に奏覽せられたのである。當時京都に於いては爲世の子孫の手によつて、新千載和歌集・新拾遺和歌集・新後拾遺和歌集の三代

の勅撰集が撰せられてゐたが、何れも爲世の撰した新後撰和歌集や續千載和歌集と別段に違つた特色は見受けられない。これに對して新葉集は誠に潑剌たる生氣が溢れてゐる。

爲世の門から頓阿、淨辨が出た。世間では淨辨の子慶運と吉田の兼好とを併せ稱して和歌の四天王といつてゐる。頓阿は武人の出であつて、俗名を二階堂貞宗といつたが、弱年にして叡山に登つて出家し、泰尋といひ、高野山に住み、更に頓阿又は感空とも號し、後には京都に還り、東山の双林寺に住んでゐた。和歌の數奇を以て當時に最も重んぜられ、黑衣の身を以て、寂蓮の先蹤の如く、新拾遺和歌集の勅撰に參與した。其の集に草庵集・同續集があつて、其の風は幼稚な技巧を弄したばかりで、西行を慕つた平素の生活に似ないものであつたが、當時を風靡したばかりでなく、足利時代の歌壇を指導し、又遠く後世までも、本居宣長などの如き景慕者を出してゐる。殊に二條家の歌學を傳へて井蛙抄の著があり、又二條良基が其の說を錄したものに愚問賢注といふのがある。頓阿は其の歌學によつて亦、一世に尊崇せられた。是より其の子孫が二條家の歌學を傳へて、和歌の宗家の如く重んぜらるゝ事となつたのである。

兼好は吉田社の祠官の出で、其の和歌の傳統は明でないが、後宇多天皇に仕へ、天皇の崩御の時に出家したと傳へられてゐるから、恐らく又二條家の和歌を承けてゐたものであらう。彼も亦西行の如く諸國を抖藪行脚し、風流を以て自ら持して居つたが、其の和歌は必ずしも見所あるものではない。集は兼好法師集といつて世に行はれてゐるが、彼は和歌よりも寧ろ其の隨筆徒然草を以て世に顯はれてゐる。二條良基は頓阿或は冷泉爲秀等に和歌の道を問うたが、其の詠歌はあまり傳つてゐない。時人は風月の事年來更に沙汰に及ばず、連歌に於いては拔群の由世以て謳歌すと評してゐる。併し歌學の書には前記の愚問賢注の他に近來風體抄の著があり、當時の歌人を品評してゐる。なほ良基の

連歌の事は後に述べようと思ふ。

和歌は古典文學であるから古い傳統のある社會の持物であるのは當然だけれども、鎌倉時代から新しい武家の社會にも其の趣味が普及してゐた。鎌倉右大臣の様な歌仙や、宇都宮蓮生の様な上手も出てゐたのは人のよく知つてゐる事であるが、これは京都の高い文化や其の趣味が、段々と低い鎌倉の方へ流れて行つたからで、和歌だけに限らず、音樂や、又蹴鞠の様な遊戯までも普及して行つた。足利尊氏は鎌倉にゐた時から、旣に其の氣分の內に浸つてゐたらうが、京都に出て公卿交りをするに及んで、一層其の方の趣味に觸れて行き、京都に出た翌建武元年七月には笙始の儀を行つて、音樂の稽古に勤しんでゐるが、和歌の方では其の翌建武二年正月の中殿の晴の御會には、遙々鎌倉から詠進し、又同年の千首和歌にも題を賜つて詠進してゐる。翌年の九月十三夜には住吉社に月の歌九首と、法華品題の和歌三首とを奉納し、曆應二年十二月には春日社に七首和歌を奉納し、なほ觀應二年九月には醍醐に於いて靈夢を感じ松尾社に御樂和歌を獻じてゐる。其の他頓阿の草庵集によると、幕府では每年七夕には歌合を行つたらしく、又慶運の集によれば幕府に歌神住吉社を勸請した。或は俊成卿の宅趾の玉津島明神を再興し、頓阿の子經賢を其の別當に補した。これが五條の玉津島神社である。これによつても隨分歌道の執心が深かつたことが知られる。彼は爲世の孫爲定に和歌を學び、遂に爲定から三代集の傳受をさへ受けた。

尊氏はかういふ風に歌道に深い執心を持つてゐたから、勅撰集の事を歌道の一大勝事と信じてゐたに相違はない。殊に老いたる彼の師範爲定の爲めに、勅撰集撰者の名譽を荷はせようとしたのであらう。延文元年六月に、撰集の事を執奏した。時の主上は後光嚴天皇である。天皇は時勢といひ、又歌道に對する御造詣の御分際といひ、餘程思召頗

はされたのであつたが、幕府の執奏默し難く、遂に勅許遊ばされた。其の時爲定は既に出家してゐたのであるが、これも尊氏の執奏によつて、千載集の時の俊成の前例に從つて、撰者を命ぜられたのである。後延文四年四月に至つて、四季の部が出來上つて奉覽せられた。是が卽ち新千載和歌集である。後光嚴天皇に撰集の叡慮がなかつたのに、尊氏がこれを執奏したのは彼自ら歌道に執心を持つてゐたからでもあらうが、又撰者爲定が乃祖累代の嘉蹤を追ふ事を希望したからでもあらう。而もなほ當時に於いては、勅撰集の事は主上御一分の單なる純文藝上の御事業といふばかりではなく、一の朝廷の公事となつてゐたので、幕府は從來朝廷の政務、公事に干與する事に慣れてゐたから、尊氏は此の執奏を以て當然の事と信じてゐたのであらう。鎌倉時代に於いては實に頻繁に撰集が行はれた。これは御歷代何れも歌道に御執心であらせられたからではあるが、餘り度々行はれてゐる間に、少しづゝ形式的になつて來た上に、主上が何時も御幼少でゐらせられる關係から、多く仙洞御所で行はれるので、次第に院政といふ事に結び付いて、一種の朝廷の公事と目せられる樣なつたのであらう。以前に光嚴上皇が風雅集を御自撰遊ばされ際たも、始め上皇は康永二年頃から撰集の御希望があつて、それを幕府に仰せ出されて御諮問遊ばされたのを、幕府は荏苒として奉答する所なく、翌康永三年九月に、足利直義が從三位に昇敍した、其の御禮に院參した時に、御催促遊ばされて、漸く撰集の事が決定したが、折から奈良の興福寺と東大寺との間に爭があり、春日社の神木や東大寺八幡宮の神輿の御動座の事があつて又延引し、翌貞和元年四月に愈御著手あらせられた。これは全く上皇の御自撰の事で、本來ならば何等幕府に御相談遊ばされる必要のない事であるが、それを而も御相談遊ばされたのみならず、長い間其の奉答を御待ち遊ばされ、直義が御請申上げて、始めて御著手遊ばされたのである。畢竟これは勅撰の事が公事であつて、當時幕府は

必ず朝廷の公事に干渉してゐたから、殊更にかういふ御手續を御取り遊ばされたのであらう。

新千載集の次に出來た勅撰集は新後拾遺和歌集である。これは貞治二年二月に爲明を撰者として撰集を命ぜられ、翌三年四月に奏覽せられたものである。此の撰集も亦將軍足利義詮の執奏に基いたものである。近衞道嗣の日記愚管記によると、「今度の勅撰の事、衆人甘心せざる歟、然而して大樹骨張の間、是非に能はず」といつてゐる。即ち新拾遺集の編纂は朝廷側の諸臣が何れも同心せず、氣が進まなかつたのを、義詮が主張した爲めに、止むを得ず著手せられたのである。撰者爲明は續後拾遺集の撰者爲藤の子である。彼は爲定の尊氏に於けるが如く、義詮の師範であつたのかも知れない。後年義詮は冷泉爲秀を師範としたが、爲明は新拾遺集編纂中貞治三年に逝去したから、其の後爲秀を師範としたのではなからうかとも考へられる。爲明歿後は頓阿が彼に繼いで編纂した。此の撰集は前の新千載集と同じく後光嚴天皇の御宇であつて、こゝに始めて一代二度の勅撰といふ新例が開かれた。前に後醍醐天皇の御宇に、續千載集と續後拾遺集との二集が出來たが、續千載集は後宇多法皇の院宣によつて編纂せられ、續後拾遺集は後醍醐天皇の御親政以後、綸旨によつて撰集を始められたので、今度とは事情が相違する。今度の一代二度の勅撰は全く新儀である。併し幕府では前將軍尊氏は延文三年四月、新千載集編纂中に薨去したので、全く代替りをして居り、幕府本位にいへば一代一度である。義詮は自分の代になるや否や、而も新千載集奏覽後、僅かに四年にして又勅撰の事を執奏したのである。こゝに於いて勅撰集の事が次第に幕府本位になつて行つた跡が窺はれる。

次の新後拾遺集も亦足利義滿の奏請によつて編纂せられたのである。後圓融天皇の御宇永和元年六月に、爲定の子爲遠に撰集を命ぜられた。爲遠も亦義滿の推擧した所である。然るに爲遠は撰歌半ばに夭折したので、義滿は尋いで

爲冬の子爲重をして其の後を襲はしめ、永徳二年三月に奏覽を遂げられた。今、以上に說明した是等の勅撰集の撰者の家筋の關係を參考の爲め左に示して置かうと思ふ。

```
爲家┬爲氏（二條）─爲世─┬爲通─爲定─爲遠─爲衡
    │                   ├爲藤─爲明
    │                   ├爲宗
    │                   └爲冬─爲重
    ├爲教（京極）─爲兼─忠兼
    ├爲顯
    └爲相（冷泉）─爲秀┬爲邦
                      └爲尹……
```

義滿は永和元年八月二十五日に幕府に和歌會始を催した。近衞道嗣は其の日記に「勅撰の事に依りて此の事ある歟」といつてゐる。從來撰集の行はれる時には、朝廷では每度撰歌の材料を得る爲めに、廣く百首和歌を召され、又度々和歌御會を催されたのであるが、此の時は義滿は率先して、禁裏の御會の外に、自ら勅撰集の材料の爲めに、私に和歌會始を催したのである。これによつて幕府が段々勅撰集の事に深入りをして行く事がわかる。それによつて、同集の序文にも、叡德を賛した文句の次に、「しかのみならず、征夷大將軍左のおほいまうちぎみ、片糸のみだれしを治め、かげ草の衰へしをおこして、外には八隅をまもり、內には萬のことわざをたすく、まことに君も臣も、身をあはせた

るをりなるべし」と幕府の德を褒めたゝへてゐる。勅撰集は勅命によつて編纂するもの故、序文に叙德を頌する辭句のあるのは當然の事であつて、古今集の序文以後常套の事であるが、其の勅撰集の序に、本來緣のなかるべき筈の武家を謳歌する文句のあるのは極めて變則でなければならぬ。當時の勅撰集編纂の事情に通じなければ、此の變則なる序文の解釋は殆ど不可能であらう。

尊氏以來、義詮、義滿と、代々奏請して來た勅撰集の事を、次の義持の代には奏請しなかつた。これは彼は父祖累代の如く、和歌に對して深い趣味を感じてゐなかつた爲めであるかも知れない。彼も亦當時の公卿交りをする爲めには和歌を弄ばざるを得ないので、內裏の九十番歌合に詠進したり、或は御題を賜つて詠進し、又院參して御連歌の一座に加はる等、和歌に關する事蹟も全く無いのではないが、彼の時代は父祖三代の時に比すれば、遙に多く記錄類が遺されてゐるにかゝはらず、彼の和歌に關する事蹟は甚だ貧弱である。一方又代々の宗匠家なる二條家は斷絕し、冷泉家に於いても、勘能の聞えのあつた爲秀は既に世を去り、其の子爲邦は父に先だち、爲尹が居つたが、冷泉家は當時の勅撰がゝりに反對する態度を取つてゐたので、それでも撰集を始めるとなれば、全く撰者が無いわけでもなかつたらうが、餘り和歌に熱心でなかつたのか、遂に勅撰の執奏をしなかつた。義持は和歌の事は明魏に尋ねてゐた。應永二十四年八月に南都に下向した時には、明魏が其の行に從つて和歌を詠んでゐる。又同二十九年十二月に、諸人に和歌を召して明魏をして點をさせてゐる。明魏は後醍醐天皇に仕へて誠忠を盡し、文貞公と謚せられた花山院師賢の孫、家賢の子で、始め長親といひ、吉野朝に仕へて從一位右大臣に至つた。後出家して明魏といひ、耕雲と號し、京都に上り、東山花頂山下に隱棲してゐた。和歌を父家賢及び宗良親王に學んだので、又二條家の流を奉じたものであ

る。併し南朝方の風を承けて其の歌は平板な二條家の風に滿足してゐない。其の作は新葉集中に多く見え、又耕雲千首の著がある。學和漢を兼ね、京都に上つてからも一般から尊信を受けてゐた。

二條家が斷絶した後は、其の家の歌學は頓阿の子孫が繼承した。頓阿の子に經賢があり、其の子に堯尋、更に堯孝、堯憲等と相續して行つた。堯尋は應永頃、堯孝は永享、嘉吉、文安頃、堯憲は寛正、文正、應仁、文明頃に活躍してゐた。一方冷泉家では爲相の子に爲秀あり、其の子に爲邦、爲尹がある。爲相は爲氏、爲教の爭には寧ろ爲教側に同情した。其の主張や態度は二條家の制の詞の拘束や平板な風を貶け、人々其の得たる體にて和歌を詠むべしといつた。爲相は晩年鎌倉に下り、爲秀も東國に居つたが、後京都に上り、爲兼無き後の京都の御所に用ひられ、光嚴上皇が風雅集を御自撰遊ばされた時も、それに參與して、實際の撰者の如き仕事をしてゐた。更に二條家の斷絶して後には一般の尊信を受け、將軍義詮の師範となつた事は前にも述べた通りである。爲秀の門からは今川了俊が出た。了俊は幕府旗下の巨族今川範國の子で、始め貞世といひ、義詮、義滿に仕へ、九州探題として武勳が多かつたが、義滿の意に悖り隱居した。彼は爲秀、爲尹の說を紹述し、二條家、殊に頓阿の風を極力攻擊したのである。

幕府では義持の子義量早世して、義持の後は弟の義教が嗣いだ。義教は父祖の誰よりも更に歌道に熱心であつた。幕府では月次の和歌會と連歌會とが催されてゐた。永享五年八月十日幕府の連歌の會に、義教は三寶院の滿濟准后に向つて勅撰集編纂の希望を述べ、勅撰の事は自分年來の希望であり、且つ尊氏以來代々の佳例でもあるから、一層それを熱望してゐるが、和歌兩神の神意嚴重な爲め、躊躇してゐるといひ、滿濟をしてそれを飛鳥井雅世と堯孝とに相談させた。滿濟は翌々十二日に其の宿坊法身院に雅世と堯孝とを呼んで相談した所が、兩人共に撰歌の事は天下安全

の兆であるといつて慶賀し、将軍は神意を畏れてゐるが、撰集の間に不法の儀があれば、それは撰者の失で、公方としては苦しからぬ事であるといつた。十五日には滿濟はそれを復命したが、義教はなほ神意を慮つて、住吉、玉津島兩神の御前で御鬮を取り、それによつて決定しようとした。併し兎も角も其の日将軍の計ひとして撰者を雅世に、和歌所の開闔を堯孝に決定してしまつた。十七日御鬮を戴いた結果は吉であつたので、漸くにして始めて撰集の事を後小松法皇に奏聞し、十九日に至つて愈其の事が確立し、二十五日に後花園天皇の綸旨によつて、雅世を撰者に任命せられた。卽ち此の集は元來が将軍義教の希望に基いたもので、義教は先づ內々に撰者や開闔を任命して置いて、道具立を全部仕上げて後に、始めてそれを奏聞したのである。されば表面の形式は勅撰集であるけれども、內實は幕府の打聞、卽ち私撰集であるといふべきであらう。義教は勅撰集の編纂を「等持寺殿以來代々御佳例」といつたけれども、尊氏も義詮も、義教ほど朝廷を蔑如した、獨斷な態度を取らなかつた。併し尊氏の執奏も、義詮の執奏も、當時朝廷に於かせられては少しも御希望がなく、唯武家の執奏默し難いばかりに撰集を命ぜられたのであつて、要するに義教とは五十歩と百歩との相違である。結局當代の勅撰集は頗る武家本意のものといはなければならぬ。

飛鳥井雅世は雅緣の子であつて、父雅緣が二條家斷絕の後、地下の堯尋に對して、堂上に於いて二條家の歌道を唱へてゐた跡を承けたのである。元來飛鳥井家の家祖雅經は、和歌を俊成に學び、新古今集の撰者の一人に加へられ、子孫代々歌道に携はり、雅經の孫雅有は爲家に學び、爾來同家は二條家の傍流の觀をなしてゐた。此の時に至りて、二條家の後を承け、數代中絕した曩祖の跡を興して、勅撰々者の命を拜するに至つたのである。此の集は永享十年八月に奏覽を遂げられた。卽ち新續古今和歌集であつて、勅撰集最後のものである。

此の時雅世及び堯孝に對抗して歌才を以て世に認められてゐたものに東福寺の徹書記がある。徹書記名は正徹、號を清巖、又招月或は松月といつた。和歌を了俊及び冷泉爲尹に學んで、冷泉家よりも更に自由な風を歌ひ、一意定家に歸らん事を志し、「抑於二歌道一定家を難ぜん輩は冥加もあるべからず、罸を蒙るべき事なり」とまでいつてゐる。彼は非常に多作を以て聞え、壯年よりの詠歌二萬七千餘首もあつたのが、東山の草菴で燒失したといふことであるが、それでもなほ其の集草根集には一萬一千餘首が收められてゐる。單に多作であるばかりでなく、恐らく當代第一の歌人であつたのであらう。常に極力堯孝等の二條家の說を破つた爲めに、遂に新續古今集には其の詠一首も入れられなかつた。

今も述べた樣に勅撰集は此の新續古今集を以て最後のものとする。併しながら、是は此の以後歌道が急に衰へたことを意味するのではない。歌道は相變らず盛であり、寧ろ益〻盛になつた樣でもあるが、又其の和歌の談ずるに足りなくなつた事も益〻甚しくなつて行つたのである。將軍義教の子義政は父よりも更に歌道に熱心であつたのみならず、事每に父祖の行跡を模倣してゐた人である。等持寺殿以來代々の御佳例を、彼は其の長い生涯の間に、どうして追はうとしなかつたのであらうか。もしさうだつたとすれば、隨分解し難い一つの不思議であるが、實際にはそんな不思議はなく、最後の勅撰集の後に今一回撰集の計畫があり、而もそれが義政の執奏に基いたらしい樣子が窺はれるのである。公卿補任の寛正六年の條下、飛鳥井雅親の尻付に、二月二十二日に、勅撰の院宣を給はつたことが見えてゐる。此の事はなほ他にも諸家傳、大乘院日記目錄及び同年に義政が春日社に參詣した時の春日社參記にもそれが見えてゐる。尋いで撰歌の材料として、例の通り百首和歌を召させられたらしく、撰者雅親の家の集亞槐集や、姉小路

基綱の卑懷集に翌文正元年二月に百首和歌を獻じた事が見えてゐる。書物によつては此の文正元年に勅撰の事を仰せ出されたと記したものもあるが、それは百首和歌の事を思ひ誤つたものである。撰者の雅親は新續古今集を撰定した雅世の長男である。堯孝の子堯憲の書いた和歌深祕抄によると、今度は彼が開闔に補せられ、基綱、冷泉爲富、甘露寺親長が其の寄人に任ぜられたといふ事である。基綱は春日社參記の內に、和歌所の寄人になされたのは、身にとつて重代の名家でもないのにといつて非常に悅んでゐる。爲富は爲尹の孫で、それは重代の名家である。此の時は和歌所を撰者雅親の私邸に置かれた。そして幕府は四月十八日に和歌所の作事の費用を送り、義政は其の二十五日に建築の事始を行ふ樣にと決した。これは幕府が今度の勅撰にも干與してゐる證據である。併し此の事始は此の指定の日時に行はれずして、後になつて、九月二十八日に遂行せられたらしい。文正元年の百首和歌について、近衛房嗣は其の五月十日に詠進すべき命を承け、六月十三日にそれを撰者雅親の許に送つて添削を受けようとしたが、幕府からそれを見せる樣にとの事で、度々撰者に催促し、八月二十八日に其の返附を受け、二本淸書して、三十日に至り、一本を幕府に送り、他の一本を後花園上皇に進覽してゐる。此の事によつても亦此の撰集と幕府との關係を推測する事が出來る。かくて和歌所の事始も濟み、諸家から百首和歌も徵せられ、撰集の事も無事に進行した事と思はれる。春日社參記には雅親は撰集の事に忙殺せられて、義政の社參に扈從しなかつたと見えてゐる。然るに翌文正二年卽ち應仁元年になつて、京都は未曾有の大亂に襲はれ、撰集などゝいふ平和な氣分が一掃せられてしまつた。殊に六月十一日には早旦から黃昏に至るまで、西方に數ケ度の燒亡があり、雅親の亭も和歌所以下悉く燒失してしまつた。恐らく撰歌の材料も悉く烏有に歸した事であらう。これからは長い間、京都にはずつと心安い日とてもなく、雅親は文明五年に

出家して榮雅といひ、遂に京都に居られなくなつて、近江に逃れて其の松本といふ所に隱棲した。これが爲めに勅撰再興の機運も絕え、第二十二代の勅撰集は奏覽の運に至らず、事實上新續古今集を以て最後の勅撰集としてしまつた。

義政の男義尙は、九歲にして征夷大將軍を宣下せられ、十五歲より自ら天下の政務を執り、文字通りの年少氣銳で、銳意傾きかゝつた家運の挽回に努力した。文明十六年に祇廟多田院に五十首の和歌を獻じ、「文道にをきて其名たかく、武藝に至つて其譽おほひならむ」と祈つてゐる。和歌に於いては雅親の弟雅康に師事し、頗る熱心で又詠み口でもあつた。十四歲の頃から幕府で月次和歌會を催し、二十歲の文明十六年には夢中に後京極攝政良經と和歌の事を談じたので、後に其の影供の和歌會を開いてゐる。これ程和歌に執心を持つてゐたから、もし世間が平穩だつたならば、彼も恐らく父祖の蹟に倣つて勅撰集の事を執奏したであらう。師範の雅康は文明十四年に出家して宋世といひ、近江の柏木に隱れたが、彼が撰集を執奏する氣だつたならば、其の歸洛も不可能ではなかつたであらう。延德元年、二十五歲の時、近江の六角高賴が幕命を奉じないのを怒つて自らこれを征し、陣中に薨じたが、彼がもし更に長壽を保つてゐたならば、或は其の執奏をしたかも知れない。併し彼の歌道に對する執心は、其の奏請の機を待たしめず、自らの手により、自らの名に於いて、打聞の編纂に著手せしめた。其の編纂事業は極めて大規模であつた。文明十五年二月一日始めて室町の營中に打聞所を置き、隔日に寄合つて撰集に從事した。彼自ら撰者となり、御手傳衆として、公家衆では姉小路基綱、武家の被管では二階堂政行、河內賴行、杉原賢盛、大館尙氏が參與し、政行は奉行、賴行は開闔、尙氏は申次の役に當つた。尋いで手不足を感じたと見えて、新に人數を增し、公家衆では中院通秀、甘露寺親長、三條西實隆、中山宣親、勸修寺政顯、冷泉爲廣、武家衆では一色政熈、岩山尙宗を加へ、かくて撰歌の材料を廷臣及び

武家衆に募り、或は古い歌集を搜索し、或は五十首和歌を詠進せしめ、又打聞所で著到百首の催しなどし、翌年九月十八日に至つて愈巻第一春歌上の淸書に著手し、名を假りに撰藻集と名づけ、巻頭には雅親の詠を載せた。かくて第二卷、第三卷の淸書も出來上り、第二卷の卷頭には後土御門天皇の御製、第三卷の卷頭には後花園天皇の御製を戴いた。かういふ風にして事業は斷續しながら數年に亙つて繼續せられたが、長享元年に近江に出陣した爲に、一時中止せられ、其のまゝ延德元年に鈎の陣中に病歿し、遂に又完成を見るに至らなかつた。第二十二代の勅撰集といひ、義尙の此の撰藻集といひ、時勢に累せられて、とう〳〵世に出るに至らなかつたのである。

此の打聞の編纂に參與した公家、武家の人々は當時の歌壇を代表する作家であつた。此の內後になつて最も歌名を揚げるのは實隆である。其の頃上には後土御門天皇、後柏原天皇、後奈良天皇がゐらせられ、歌仙の御名が高かつた。歌道に精進してゐたのは幕府ばかりでなく、公家に於かせられても、月次の御會の外に、千首の著到和歌などが頻繁に行はれてゐた。後土御門天皇の御集を紅塵灰集と申上げ、後柏原天皇の御集を柏玉集と申上げる。此の柏玉御集と實隆の家集雪玉集及び冷泉政爲の碧玉集とを併せて三玉集と稱して、後世より非常に尊重せられ、殊に實隆の雪玉集は二條家の眼目といはれて、近世堂上和歌の標的となつたのである。實隆の子に公條あり、公條の子に實枝あり、三代箕裘を繼いで家聲を墮さず、近世初頭に最も名の高かつた細川幽齋は實に歌道を實枝から承けたのであつた。

實隆は歌學、特に古今集の傳受を連歌師宗祇から受け、宗祇はまたそれを東常緣から受けた。古今傳授の事は別の所で述べるが、東常緣は歌名は非常に高いけれども、それは主として古今傳授の爲めで、實際の手腕はそれ程でもない。彼の祖重胤は鎌倉幕府の御家人で、和歌を爲家に學び、其の子胤行は爲家の女を娶つて御子左歌學の奥祕を授け

られ、爾來累代和歌の名があつた。彼は正徹と堯孝とに學び、冷泉と二條との兩流を傳へたのであつたが、遂に二條家に歸し、上洛して歌道を公家衆に授けてゐた。其の奥heading頭を傳へたのは宗祇で、宗祇の門人肖柏、宗碩、兼載等は連歌と共に和歌をも嗜んでゐた。

武家で和歌に名のあつたものには、常緣の美濃郡上に於ける所領を押領し、常緣の詠歌に感じてそれを還附したと傳へられてゐる齋藤妙椿があり、尋いで江戸城を築いた太田資持道灌がある。遠江の今川氏、周防の大内氏等は夙くより卿搢を其の分國に迎へて、上國の文物の移植に力めたので、將士に和歌の趣味が普及した。其の傾向は次第に廣くなつて、所謂戰國の群雄の間にも、毛利元就や武田信玄などの樣に達者な歌人も少くなかつた。

三　連　歌

建武元年、二條河原の落書に、「京鎌倉ヲコキマセテ、一座ソロハヌヱセ連歌、在々所々ノ歌連歌、點者ニナラヌ人ハナキ」といふ一節がある。是は當時に於ける連歌の繁昌を諷したものであるが、誠に此の時代は貴きも賤しきも、京都も田舍も、すべてこれ連歌沙汰、此の趨勢は此の時代の末までずつと續いて、德川氏の時代になつて、世が變はると漸く頓に衰へ、近世に於いては連歌は唯其の形骸を遺すだけになつた。連歌は實に此の時代に繁昌した文學であつて、又如何にも此の時代向きの文學でもあつた。

連歌といふものは、和歌の上の句と下の句と、或は下の句と上の句とを、二人で相唱和して、續けて一首の和歌と

したもの、元來卽興的のもので、作者の機智が悦ばれたのである。從つて又內容は俳諧的であつた。それは和歌の一種の遊戲化であり、文藝の一つの形式と見るべきものではない。かういふ遊戲は和歌が盛に行はれてゐる時には何時でも起り得るもので、萬葉集には既に連歌の形になつた唱和が見えてゐる。それが平安朝時代の末になつて、上の句から下の句を續ぎ、更にそれに又上の句を續ぎ、又下の句を續ぐといふ風に、鎖の樣に長く連續して續いで行く連歌が行はれ始めた。これを鎖連歌といひ、それに對して上の句、下の句一句づゝ、卽ち一首の和歌の形になる連歌を言捨の連歌といつた。鎖連歌の發成は恐らく支那の聯句の影響などによるものでもあらうが、これから連歌は次第に文學的な內容を有つ樣になつた。言捨は此の後もなほ行はれてはゐたが、それは何時も卽興的、且つ遊戲的なものであつたのである。

鎖連歌の漸く盛になつたのは後鳥羽天皇の御時からで、心敬のさゝめことにも、「水無瀨川よりなかれて、數をつらぬる事となり侍る」といひ、二條良基の筑波問答にも、「後鳥羽院建保の比より、しろくろ、又色々のふし物のひとり連歌を、定家、家隆卿などにめされ侍りしより、百韻などにも侍るにや」といひ、實に菟玖波集などを見ても、當時の百韻の連歌の中の句が載せられてあり、又定家の明月記にも鎖連歌盛行の有樣がよく窺はれる。其の頃連歌は歌人達の餘技として行はれ、和歌の宗家の如く見られてゐた定家の子孫の間に連歌の式目などを作つて、又其の方でも權威を有つてゐた。堂上の歌人の連歌に對して、道生、寂忍、無生などの地下の連歌師が出で、かくて應長の頃になつて、連歌は漸く其の道の者の手に歸する樣になつたのである。心敬のさゝめことに「此道およそ應長の頃より、よにさかりにもていてたるとみえたり、其頃の先達と覺侍は善阿法師といへるもの也」といつて、善阿から當道の連歌

が興つたといふのである。梵灯庵も善阿法師が出て、花の下紅葉の陰に宴席をのべ、人を集めてから、世間では連歌は地下のものと心得るのはをかしい事で、以前には爲家、爲氏など此の道の堪能にて、堂上を出でなかつたといつてゐる。兎に角、善阿によつて地下の連歌師の位置が確乎たるものに築き上げられたのであらう。應長といふ年號は年を跨いで一箇年足らずの短いもの故、特に此の年號を指して「應長の頃より」といつてゐるのは、宗匠になつたとか何とかいふ特殊の事件があつたのでもあらうが、菟玖波集には「正和元年二月法輪寺千句に」といふ詞書のある彼の句がある。（正和三年に作つた本もあり。又二月を三月に作つたものもある）正和元年二月は實は改元以前で應長二年なのである。或は善阿は此の法輪千句の懷紙によつて後世から認められたのでもあらうか。二條良基も「善阿といひしものならびなき上手」といつてゐる。彼の門人に救濟、順覺、信照、良阿、十佛など名聲嘖々たるものが多く、救濟の門に良基、周阿などが居つた。救濟は殊に出藍の譽があつて、梵灯庵も其の句を評して「たゞおもひ入て、いか程もしほれたる所に心をかけ」たといつてゐる。物に比へれば、荒れた宿の築垣も、傾く軒の檜皮は忍草など茂く、春の月の朦朧としたのが、御簾のひまからほの〴〵とさし込んだのに、端近く人の音なひも無いといふ様な風情であるといふ。周阿は救濟の衣鉢を繼いで、一人其の風を遺し、天下これをたよりとして學んだといはれてゐるが、又「攝家も救濟もよろしからぬよし侍しとや、げにもいさゝかあらゝかにほしきまゝのかたのみにて、面影しなあはれをくれて見え侍る哉」と品隲せられてゐる。併し救濟の老後は周阿の風が天下を風靡したのである。是等の間に良基は「二條太閤此道の聖におはして、彼御頃より盛にもてあそひ侍り」といはれ、又前にも述べた樣に、近衞道嗣は彼を評して、風月の事年來更に沙汰に及ばなかつたが、連歌に於いては拔群の由世以て謳歌すといつてゐるのである。當

時に於いてもかくの如く既に世人から連歌の權威として認められてゐたのみならず、救濟と共に、式目を制定し、連歌集を編纂して、當道に於いて殆ど劃期的な事業を遺した爲めに、後世からも、單に攝政殿といはれて、連歌道の建設者の如く尊崇せられてゐる。身は攝籙に出て堂上傳統の權化であると共に、地下連歌の傳統をも承け、兩傳統を併せて一道の基礎を築き、以て當代連歌繁昌の原因をなしたのである。

式目は鎖連歌の單調や重複を避ける爲めに、其の續け樣の上に、色々の制限を設けた一つの規定である。これは鎖連歌が段々行はれてゐる間に次第に生れて來たものであるが、成文の式目となつたのは、良基によれば文永、弘安の頃である。卽ち筑波問答に「然るに文和（文永ナラン）弘安の比より、本式、新式など云物出來侍り、鎌倉には爲相卿藤がやつの式目とて、北林と號していたされたり、當時もちゐたる新式は大納言爲世卿作られ侍るにや、しかあれども、地下のともがらおほし（くナラン）當座の了見によりてふるき式をそむく事侍り、翁が存處の式目を出し侍る也」といつてゐる。堂上の連歌には文永、弘安の本式、新式や、冷泉爲相の藤谷式、二條爲世の新式などがあるが、地下の輩はこれに從はないから、新に堂上地下合一の立場から新式目を定めようといふのである。地下の連歌には建治の式といふのがある。これは善阿の作といふことであるが、建治は應長から三十四五年も以前であるから、年代の上で果してどうであらうかと思はれる。良基は救濟と相談して、此の建治の式を基礎として、應安五年十二月に新式を定めたのである。よつてこれを「應安の新式」といつてゐる。此の式目が出來てから、今まで色々の式目によつて區々になつてゐた方式が、こゝに一定して、永く遵用せられることゝなつた。これは連歌道の爲めには特筆すべきことでなければならぬ。此の式目も時と共に又新しい問題が起り、疑問が生じて、次第に追加の規定が設けられてゐたが、享德元年に

至り、良基の孫一條兼良が宗砌と相談して、これに增補して所謂新式追加を定めた。今ある式目は此の追加の附加せられたものであつて、古くからある文永、弘安の本式、新式、爲相、爲世の式も善阿といはれる建治の式も遺つてゐない。又現存の新式も、純粹な應安其のまゝのものではない。

これより先良基は又救濟と共に連歌集を編纂し、延文元年の春脫稿し、翌年閏七月十一日勅撰に準ぜられた。卽ち菟玖波集これである。一部二十卷で、勅撰和歌集に倣つて四季、神祇、釋敎、戀、雜、羇旅、雜體と部立をし、更に發句の部が設けられてゐる。又眞名、假名の兩序のある事も勅撰集の通りで、兩序は三月廿五日の日附になつて居り、眞名序は近衞道嗣の作、假名序は良基の作である。收むる所は上は日本武尊から下は其の時代に及び、勿論當時の句が最も多い。それによつて其の時代の連歌を槪觀する事が出來る。內に救濟自身の句が最も多く、次は良基、三千院尊胤親王、佐々木道譽、足利尊氏などが多い。善阿の句は少ししか採つてゐないが、それに比べて尊氏の句は隨分多い。これは武家を賞翫する意味であらう。假名序にも「今華闕風おさまり、柳營露あまねくして」と、幕府に對して御世辭を述べてゐる。是等の句は何れも長い鎖連歌の內から一句だけを拔き出したもので、詞書と前句とを添へて、其の附合せ樣のみを示したもので、百韻、五十韻の鎖連歌全部を載せてゐないのは遺憾である。中には一句以上連續したものもあるけれども、精々三句四句に止まつてゐる。何れにしても連歌の撰集は之を以て嚆矢とするのであつて、夙く金葉和歌集には連歌の部を立てゝ少々連歌を載せてゐるが、句數も僅少なる上に、皆言捨の句ばかりで、眞の連歌といふべき鎖連歌の內から二千餘句も採つたのは偉としなければならぬ。誠に連歌道の爲めに氣を吐くものである。

救濟、良基、周阿世を去つて後に、應永年中に於いて、朝山梵灯庵、今川了俊、成阿、平井道助等が輩出した。心敬は「應永年中の比より世に聞え侍る人々には、今川了俊、成阿法師、梵灯菴主、波多野、外山、平井入道々助、遁世者には中宜菴主、頭阿、畠阿などゝて、やむことなき作者侍し、この內にも末の世まで殘り、世一の先達の名をえしは梵灯菴主也」といつてゐる。誠に梵灯菴は當時第一の作者であつた。應永年間に出來た大塔物語に「侍從、周阿彌之古樣」といつてゐるから、梵灯菴が出てからは、救濟、周阿の風が一變したのであらう。又心敬に從へば「梵灯菴主よろしき好士にて世もてはやし侍しに、四十のころより陸沈の身になりて、ひとへに此道をすてゝ、つくしのはて、あづまのおくに跡をかくし侍る事、廿とせにも及侍るにや、其後六十あまりにて都にかへり侍ては、ことばの花色香しほみ、心の泉なかれ渴にや、風體たつ〳〵して、前句ともひたすら忘れ給へるとなり」といふことである。成阿は洛東新熊野の時宗の上人であらう。道助は大內氏の被管であつた。歌人として名のある了俊は亦連歌にも遊んだが、當代の第一の歌人といふべき正徹書記も險難な賦物ばかりの千句を作つてゐる。此の後に輩出する連歌師は宗砌といひ、智蘊といひ、心敬といひ、多く和歌を徹書記に學んだものである。

梵灯菴は文安五年に歿したが、其の前後から應仁、文明の宗祇が出興するまでの時期に、宗砌、智蘊、心敬、宗伊、行助、專順、能阿等の好士が出た。宗祇は此の七人を七賢人になぞらへて、其の句を撰集して竹林抄十卷を著した。七賢の內では宗砌は最も顯はれて連歌の中興といはれた。宗祇は連歌の歷史を上古、中古、當世と三期に分ち、宗砌が出てから後を當世といつてゐる。竹林抄の內でも彼の句が最も多い。彼は高山時重といふ武人の出で、もと山名氏に仕へた。和歌を徹書記に學ぶと共に、連歌を梵灯菴に學んだ。文安五年には北野會所の奉行になつた。會所の奉行

を宗匠といふのである。彼は發句よりも附句を得意とし、心附けの新しい境地を開いたといはれてゐる。宗砌に名を等しくしたのは心敬である。心敬は十住心院の僧で、救濟或は梵灯菴に敎を受けたらしい。宗祇の如く四方に漂泊し、又さゝめこと、老のくりこと、馬上集、庭訓、比登理言等の多くの連歌の學習書を著はしたので聞えてゐる。智蘊も宗伊も共に武家の出である。智蘊は幕府政所の執事伊勢氏の被管で、蜷川新左衛門尉親當といひ、一休和尙に參禪し、其の禪問答の俗傳で人口に膾炙してゐる。宗伊は幕府の近習者杉山賢盛で、又能阿は幕府の同朋、專順は池坊花道の祖としても知られてゐる。

連歌の發達は宗祇が出たことによつて、最も頂點に達した。宗祇は實に連歌道を代表する偉人である。彼は飯尾氏といはれてゐるが、種姓貫族未だ明ではない。夙に和歌に志し、美濃に東常緣を訪うて古今集の傳受を受け、又連歌は心敬を師とし、宗砌其の他の先輩から爺を受けた。なほ蘭坡から山谷の詩の講談を聽き、三條西實隆に有識故實の事を問ひ、吉田兼俱に神道の說を受ける等、極めて趣味が廣かつた。西行を敬慕して隱逸の生涯を營み、草庵を自然齋或は種玉菴といひ、一所不住の抖藪を事とし、東は武藏野、北は越路、西は筑紫まで、心の導くまゝに、足にまかせて步いたのである。心敬といひ彼といひ、東西に放浪したのは、戰亂の巷、騷人の止住に便がなかつたのと、且は又地方の豪族の間に連歌が普及して、其の招きによつたのである。越後の長尾氏、越前の朝倉氏、周防の大內氏、肥後の相良氏、何れも彼を招聘した。彼の連歌は優麗にして而も幽玄である。凡ての藝術は皆其の技巧の頂點に達した時は必ず形式が整ひ、優美にして且つ幽玄になるものである。連歌も宗祇によつて其の技の頂點を示し、これから後は次第に技巧の退步する事を豫告してゐる樣に思はれる。更に宗祇は心敬に劣らざる多くの著書を遺し、連歌道或は連

歌説を大成した。二條良基の筑波問答に擬して書いた吾妻問答は彼の早期の著述であるが、好士の多く準據するものである。更になほ注意すべきは連歌の集を多く撰集した事である。竹林抄を編したことは前にも述べたが、又菟玖波集に續いて新撰菟玖波集を編し、其の句集老葉、萱艸、下艸等を撰した。和歌の家集に對して、連歌の集は實に宗祇に始まるのである。

二條良基の孫に當る一條兼良は、菟玖波集の後を襲はん爲めに、其の後の作者の句一萬を集め、二十卷となし、新玉集と名げ、勅撰に准ぜられん事を奏請しようとしてゐる間に、應仁の大亂が起つて、其の桃華坊の文庫は、土一揆達の蹂躪する所となり、新玉集の草稿も遂に散佚してしまつた。兼良の子冬良は父の志を繼がうとして、撰集の事を宗祇に囑し、明應四年に脫稿したものが此の新撰菟玖波集である。尋いで菟玖波集の例によつて、又勅撰に准ぜられた。此の書の體例はすべて菟玖波集に倣ひ、二十卷で、部立も彼と同じく、句數も亦約二千句である。唯作者は後小松天皇と大内持世とが最も早く、其の他概ね七賢時代以降、寧ろ宗祇と同じ頃の人のみで、菟玖波集が古今に亙つてゐるのには似ない。內句數の最も多いのは宗祇の師心敬の百二十三句で、次は宗砌の百十句、七賢の內では專順が百八句、智蘊が六十六句、宗祇自身が五十三句、兼載が五十二句あるのに、宗伊は四十六句、能阿彌は四十三句しかない。菟玖波集では尊氏の句を澤山採つたのに、本集では義政が二十六句、義尙が三句あるのみで、却て當今後土御門天皇の御製を百九句も收め奉つたのは注意すべきであらう。そして此の撰集の因をなした兼良の句は僅に二十四句で、宗祇をして撰集せしめた冬良は七句のみであるのもおもしろい。

宗祇と同時の人で、且又彼に劣らぬ名を馳せたものに兼載がある。兼載は會津の人で、猪苗代を氏とし、耕閑齋と

號した。堯孝の子堯惠に和歌を學び、古今集の傳授を受け、又連歌は心敬に師事した。其の句集を園塵といひ、三巻あり、なほ若草山といふ連歌の學習書をも著してゐる。

宗祇の門人に肖柏、宗長、宗碩が最も顯はれ、宗祇、兼載去つて後の連歌壇を代表してゐた。肖柏は牡丹花或は夢菴又弄花軒と號し、宗祇から古今傳授を受け、それを奈良の饅頭屋宗二に傳へたが、世にその傳を古今の饅頭屋傳或奈良傳と唱へてゐる。屡宮中の連歌御會に侍し、又三條西實隆と共に、百番の連歌合を張行して、宗長に判をさせ、或は連歌新式に、今案を追補した。又古典の研究にも勤しみ、伊勢物語肖聞抄、源氏物語弄花抄の著がある。宗長は駿河島田の人、一休和尚に參禪し、大德寺の眞珠庵の側に住み、晩年は又薪の酬恩庵に近い所に菴居した。又駿河の泉谷にも隱棲し、それ等の時の事を書いた宇津山の記、宗長手記は廣く人に讀まれてゐる。又自句や師匠宗祇の老葉の注釋を書いた。宗碩は月村齋と號し、恐らく宗祇晩年の弟子であらう。一種の辭書藻鹽草十巻を著はして、連歌道の爲めに裨益する所が多かつた。宗碩の弟に永閑があり陽日齋と號した。源氏物語の末書萬水一露を著はしてゐる。

宗祇の門葉に宗牧、周桂等がゐる。宗牧は或は肖柏の門人とも或は宗碩の門人ともいはれて明ではないが、最も宗祇に傾注した。齋號を半隱軒又は孤竹齋ともいふ。宗祇の如く雲水に身を托して諸國に行脚したが、至る所で厚遇を受けたといふ。遂に羈旅の中に歿した。其の子に宗養があり、半松齋と號し、父子名を等くし、三好長慶等の崇敬を受けた。宗牧の門に里村昌休がある。もと細川高國の被管人であつたが、斯道に入り、半隱軒と號した。周桂も亦肖柏の門人とも宗碩の門人ともいふがこれも明ではない。一華堂と號し、又花道にも秀でゝゐたのである。

此の時代の連歌の終末を莊るものは里村紹巴である。彼は南都一乘院の候人の出で、始め周桂に師事し、後また昌

休に學び其の家を繼ぎ、里村氏を冒したのである。號を臨江齋とも又寶珠菴ともいつた。夙に天文の末年から所々の一座に加はり、宗養の歿後は大宗匠として、三好長慶、織田信長等に用ひられ、明智光秀と愛宕で「時は今あめが下しるさつき哉」の發句によつて百韻を賦したことはよく人の知る所である。又秀吉からも重く寵せられ、其の行には必ず從ひ、秀次の事に座して、一時近江の三井寺に追はれたが、翌年赦されて京都に歸り、慶長七年に七十九歳を以て歿した。昌休の子に昌叱があり、策庵と號した。紹巴の誘掖により、相共に連歌の席に遊んだ。紹巴が近江に追はれた時、秀吉の命によつて、里村の家督を承け、爾來連歌の宗家の如く見られてゐる。其の子孫は紹巴の子孫と共に江戸幕府の連歌師となり、連歌の命脈を幕末まで維持したのである。

最初にも言つた樣に、連歌は元來卽興的なもので、又俳諧的なものであつた。それが鎖連歌の發達してからは次第に優雅になり、元の俳諧的な連歌を無心宗といひ、それに對して優雅な連歌を有心宗といひ、此の後も鎖連歌は常に有心であり、言捨は概ね無心であつた。菟玖波集にも卷第十九雜體連歌の中に俳諧の部がある。然るに山崎宗鑑が出るに及んで、宗と俳諧の連歌を弄ぶ樣になつた。

山崎宗鑑は近江支那の人、佐々木氏の一族であるが、世を厭うて攝津に逃れ、又山城山崎に住み、後天文年中西國巡禮の途に讃岐で歿したといふ。永正中卑語俗談を以て連歌を賦し、犬筑波集を著はした。此の書は四季戀雜の部立により、言捨の附合二百七十九句、四季の部の發句四十六句を收めてゐる。此の書の出來たのは何時頃か明ではないが、發句の中に「正月七日庚申に」といふ詞書のあるのがあり、當時正月七日が庚申に當るのは延德二年と天文十六年とであるが、天文十六年は歿後か或は歿年に近い時で、これは恐らく延德二年と見る方が正しいのであらう。そし

て又「宗祇十三年追善に」といふ詞書のある發句があるが、これは永正十一年に相當する。故に犬筑波集の句は大體延德から永正頃に出來てゐたものであらう。宗長手記の大永四年の條に犬筑波集の句を載せてゐるから、此の集は其の以前に既に出來てゐたことが知られる。宗鑑は宗祇の追善の句を賦してゐるから、恐らく宗祇を尊んで有心の連歌にも遊んでゐたのであらう。犬筑波の俳諧連歌も皆言捨の句ばかりで、鎖連歌はない。但し宗鑑の俳諧は從來有つた所の卽興的な俳諧の連歌ではなく、當時去嫌の羈絆のやかましかつた有心の連歌に對して、殊更に其の羈絆から脫して俳諧に自由の天地を求めようとしたのである。それ故彼の連歌は單純に言捨ばかりではなく、俳諧の發句があり、又一つの前句に對して二樣の附句を試みたものさへある。又附合の境地も普通の連歌に見られない面白い味のあるものもあるが、槪して語路や言懸等の駄洒落が多く、且つ卑猥な句の多いのは遺憾である。

宗鑑から少し遲れて伊勢の內宮の祠官に荒木田守武が出て俳諧の千句を賦した。守武は宗祇一流の連歌師と交り、又新菟玖波集の作者である。千句は「俳諧之連歌獨吟千句」といひ、第一の發句に「飛梅やかろ〳〵しくも神の春」といふ句があるので飛梅千句ともいはれてゐる。又追加の揚句に「天文九年しぐれふるころ」の句があるので、同年の獨吟であることが知られる。守武は跋文に千句立願の子細を述べ、俳諧連歌の抱負を說いて「さて俳諧とて妄に仕笑はせんとばかりは如何、花實をそなへ、風流にして、しかも一句正しく、さておかしくあらんやうに」といつてゐる。而して春秋二句を結びたる所もあり、又差合も强ひて直さんとしなかつたといふ。彼の連歌は宗鑑の樣な自由さと覇氣とはないが、上品であり、而も鎖連歌に俳諧を試みたのは全く劃期的であり、且つ千句を仕立上げたのは感ずべきであらう。

此の頃俳諧の連歌は稍流行の兆があつたと見えて、此の他にも宗長手記に、友人と度々俳諧連歌を張行してゐることを記してゐる。彼は叉犬筑波の句を引いて、其の前句に改めて附けた自分の句を自賛してゐる。此の後紹巴の門に松永貞德が出で、俳諧の連歌を鼓吹し、宗鑑の犬筑波の前句によつて、自ら叉附句を試みて油糟を著し、叉犬筑波を批評して淀河を著し、なほ御傘を著して俳諧連歌の式目を定めてゐる。これより俳諧連歌は文藝の世界に一つの分野を占め、貞德の門下から野々口立圃、松江重賴、安原貞室、鷄冠井令德、北村季吟等出で、季吟の門から松尾桃靑が出て、近世文藝史上最も特色ある光輝を放つに至つた。

四　古典研究

和歌は中世に於いては旣に古典的な文學であつたから、其の標準は前の時代にあつた。當時の歌人は目安を平安朝時代に置いて、それを振り返り〳〵顧みながら歩んで行つたのである。其の標準となつた歌集は古今和歌集或はそれに後撰和歌集と拾遺和歌集とを加へた所謂三代集である。是等の歌集は平安朝時代の末か鎌倉幕府の頃になると一種の古典となつて居つて、漸く理會し難くなつてゐたから、次第に其の硏究が興り始めた。其の代表的のものが僧顯昭であつて、古今集、拾遺抄の註釋を著はしてゐる。彼の硏究は純粹の訓詁の學であつて、六條家風の非常に考證の該博なものである。當時六條家の歌學に對抗してゐたのは御子左家の俊成と其の子の定家とであつた。俊成も定家も純粹の文學者で、其の古典に對する態度は飽くまでも文學者風であつた。彼等は唯和歌を作る爲めにのみ古典を硏究し

たのである。それ故古典の本文校勘の如きは必ずしも嚴密ではない。又研究も考證に走らない。考證の點に於いては寧ろ顯昭に推服してゐるが、考證に縛られないだけ、原作者の眞意を汲む點では或は成功してゐる樣に思はれる。俊成も定家も歌道の練習の爲めには古今集或は三代集と共に伊勢物語及び源氏物語を讀む事を極力奬めてゐる。室町時代に於いては一般に和歌の上では俊成、定家を神の如く尊崇したのであるから、皆其の教訓を遵奉して、何れも是等の書を耽讀し、又研究する樣になつた。

定家は少くも二本の古今和歌集を寫してゐる、其の一本には貞應二年の奥書があり、他本には嘉祿二年の奥書がある。世にこれを貞應本及び嘉祿本といふ。此の貞應本は二條家に傳へられ、嘉祿本は阿佛尼が傳へ、更に其の子爲相が傳領し、今日まで冷泉家に傳へられてゐるといふ。定家はかく兩本を寫したけれども、其の內容は大體同樣であるといふことである。貞應本の原本は今日は世に存してゐないが、其の系統の本が世上一般に流布して、今普通に古今集といつてゐるのは此の貞應本なのである。後撰集も定家の貞應二年書寫の本が廣く流布してゐるので、定家はなほ天福二年にも後撰集を寫してゐる。拾遺集も亦定家の天福元年書寫の奥書ある本が流布してゐるのである。かく現在廣く行はれてゐる三代集は皆定家校勘の證本に據るのである。是は勿論中世以降の歌壇に於ける定家の勢力に基くものである。定家は三代集に就いて纏つた研究を遺してゐないが、顯昭が守覺法親王の爲めに書いた古今集の註に已說の勘を加へて顯註密勘八卷を著し、又三代集の古人の說に批評を加へて僻案抄三卷を著はしてゐる。又後撰集と拾遺集との祕說を記したものに三代集之間事といふのが一卷ある。俊成は藤原基俊から古今、後撰兩集の說を受けたといひ、定家は又治承の比、古今、後撰兩集の庭訓の口傳を受けたといつてゐる。當時は自分の研究を廣く人に示すといふ

様な風はなく、寧ろ一般にはそれを祕して、自分の子孫か又は特定の人のみに傳へるのが普通である。書物を著はすのも、多くは誰かの需に應ずる爲か、又は特殊の事情の下に筆を執るので、其の著書も外見を憚り、篋底に藏すとか、閫外に出すなかれなどゝいふ奥書を文字通りに實行して祕藏したので、特に祕說とことわらないものでも、多くの著書は大抵祕說であつたのである。故に俊成、定家の三代集に關する說も、主として其の子孫或は歌道の門弟の間のみに傳へられ、それが歌道の教權となると共に、又一般から甚しく翹望せられたのである。普通には古今傳授といふ事は東常緣が始めた事の樣に信じてゐるが、事實は決してさうではなく、古くから三代集の祕說は傳授の形式を以て傳へられ、特に其の內でも古今集の傳授を重要視したのである。其の傳授の方法は最初文字讀といつて集中の詞の淸濁及びアクセントを教へ、後に講談といつて全部の講釋をなし、祕說を傳へるのである。文字讀の證本として集中の淸濁及びアクセントに疑義のある詞に聲譜を指した古今集の本を傳へる。今日冷泉家に傳へられてゐる嘉祿本にも聲譜が指してあるといふ事である。又顯昭の古今集註の奥書にも聲を指す事が見えてゐるから、此の方法は古い事であらう。切紙傳授をする樣になつたのは稍新しい事で、それは東常緣より古くは見えない事である。

定家の子孫は爲家の後、二條、京極、冷泉の三家に分れたといふ事は前にも述べたが、其の相傳の祕說も恐らく三家に傳へられたであらう。其の內京極の家は早く斷絕し、二條家も亦斷絕して、其の家の相傳は頓阿が繼承し、其の子孫に傳へた。冷泉家も必ず家說を相傳したであらうが、此の方の流は此の時代では餘り物に見えてゐない。頓阿が相承した二條家の傳授も、頓阿以外、或は其の子孫の他にも傍系の相傳があつたらしく、紀俊長の集には四辻善成から古今傳授を受けたことが見えて居り、東坊城秀長の日記には九條經教から傳授を受けた事が見えてゐる。今日曼華

院門跡に傳へられてゐる善成の證本の古今集の聲譜と、頓阿の後なる堯憲の證本の聲譜と全く同一であるのを見れば、四辻家の相傳も二條家の傳授と同一であつたことが知られる。

二條家の古今傳授は堯孝から東常緣に傳へ、常緣は更にそれを連歌師の宗祇に傳へた。其の時宗祇が常緣の講談を筆記したものが所謂古今和歌集兩度聞書で、それには文明四年の常緣の跋がある。常緣は傳授の時宗祇に切紙を授けた。切紙には口傳の條目が記されてあり、又紀貫之以來の歌道傳統の血脈が副へられてゐる。切紙は密教の傳法の形式を眞似たものらしい。是より傳授は佛教、其の他色々なものが附會せられ、且つ如何にも尤らしい形式的なものになつてしまつた。宗祇は三條西實隆と近衞政家と及び肖柏、宗碩等の連歌師に傳授した。實隆の流を二條家の正統となし、政家のを近衞流といつた。肖柏の流を堺傳授といひ、肖柏から奈良の饅頭屋宗二に傳へたのを奈良傳授とか、饅頭屋傳授とかいつてゐる。實隆と政家との兩流は同一の源流から出たものにかゝはらず、其の切紙には多少の相違がある。近世になつて實隆が尊崇せられたから、二條家傳授が古今傳授を代表するが如き樣子を呈し、古今傳授といへば卽ち二條家傳授ばかりの樣に思はれてゐた。其の相承を煩しきを厭うて圖示すれば次の通りである。

東常緣——宗祇——三條西實隆——同公條——同實枝——細川幽齋——智仁親王
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　├中院通勝
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　├烏丸光廣
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　├三條西實條
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└松永貞德
　　　　　　　　├肖柏——宗二
　　　　　　　　└宗碩

智仁親王の御後は皇室に傳はり、後水尾天皇から後西天皇、道晃親王、中院通茂、飛鳥井雅章、烏丸資慶、日野弘資等に傳へさせられ、又貞德の後は地下歌人に傳はつて、多く分派し、所謂地下傳授となつた。古今傳授は近世になつては、最早金箔が剝げて世間から重ぜられなくなつたが、それでもなほ隨分廣く行はれてゐた。況や此の時代では特に神聖視せられ渴仰せられてゐたから、却て頗る廣く流布し、例せば常緣に傳へた堯孝は、他にも更に三寶院滿濟、細川成之、三條實量、三條西公保、畠山實能、片岡近江守等にも傳へた。右に示した二條家傳授の血脈も唯其の主流を擧げたのみで、支流はなほ澤山あり、此の他に冷泉や飛鳥井家の傳授をも勘定に入れると、一子相傳、師資相承のやかましい傳授が、恐らく天下に氾濫してゐたであらう。

源氏物語は平安朝時代の末から古典として研究せられ始めたらしい。其の研究者として最も早く顯はれたのは世尊寺伊行と俊成とである。俊成の子定家は伊行の說に自分の意見を加へて奧入と云ふものを著はし、「此物語之祖師」といはれた。併し鎌倉時代に最も行はれてゐたのは源光行の一流である。光行は俊成の本其の他所謂八種の證本によつて、此の物語の本文を勘定した。これを河內本といつてゐる。光行が河內守を拜してゐたからである。俊成の本は紫式部と大略同時代なる世尊寺行成一筆の本等を以て校訂したものである。定家は更に自分の意見等を以て多少の改訂を加へて證本を作つた。世にこれを靑表紙本といつてゐる。現今最も廣く行はれてゐる湖月抄などは靑表紙の系統に屬してゐるのである。光行は更に訓詁的研究にも從ひ、其の子親行も其の業を繼いで、遂に水原抄を著はし、親行の弟孝行（素寂）は紫明抄を著はした。かうして河內一流は此の物語に於ける權威として頗る崇信を受ける事となつた。俊成及び定家が歌道に於ける源氏物語の價値を非常に高調せしめた事と相俟つて、此の時代に及んで次第に源氏研究

が一般に行はれる樣になつた。そして世人は多く競うて河内一流の門に赴いたのである。後醍醐天皇は頗る此の物語を重んぜられ、御卽位の始め、廷臣を集めて五十四帖を講ぜしめられ、又河内本を召して謄寫せしめられた。南朝方の歌人花山院長親も亦これを寫してゐる。二條良基は親行の孫知行（行阿）から祕說の傳授を受けた。その書が卽ち原中最祕抄である。長親は更に此の書をも略寫したが、其の略寫の系統の本が現在群書類從に收められて流布してゐるのである。南朝にては長慶天皇は弘和元年に水原抄、紫明抄、原中最祕抄等の說に基いて、物語中の難語の解釋を伊呂波別に辭書の樣に御編纂遊ばされた。それを仙源抄と申すのである。其の中には後醍醐天皇、後村上天皇の御說をも引かれてあるのは誠に注意すべき事である。此の書は又源氏物語色葉聞書・源語類集或は源氏類語抄などゝも申してゐる。長親は亦此の書をも數本寫したらしく、其の筆寫の一本が現に京都帝國大學に所藏せられてゐる。群書類從中の仙源抄も亦長親系統の本である。それには長親の長文の跋があるので、世に誤つて此の書を長親或は其の父家賢の撰と稱してゐるのは跋文を誤解したものである。長親はかく河内本や原中最祕抄、仙源抄を寫した他に、自ら此の物語の大意を記して源氏小鑑を著はしてゐる。

後醍醐天皇が廷臣に此の物語を講ぜしめられた時、丹波忠守は其の撰に與り、又屢〻天皇の御顧問に應じて祕說を奏聞した。順德天皇四世の孫四辻善成は忠守に學び、自ら物語博士源惟良と作名して、至德三年から此の物語を講談したが、それが卽ち千鳥抄である。更に又源氏の詳細なる註釋を著はして河海抄といつた。其の研究は極めて該博であつて、源氏注釋の第一と稱せられてゐる。此の後の研究は多く河海の屋上に更に屋を架したものである。

善成の後に正徹は源氏一滴集を著はしたが、河海抄に匹敵すべきものには一條兼良の花鳥餘情がある。此の書は兼

良が應仁の亂を奈良の大乘院に避けてゐた時に書いたもので、古來河海と並べて源氏末疏の雙璧の如くに重んぜられたのである。兼良は此の他にも源氏物語和秘抄、源語秘决抄、源氏物語年立、源語装束抄等を著はしてゐる。源氏物語三箇之大事と稱して此の物語の祕說としてゐる事も、花鳥に祕事として記されなかつた所謂花鳥以外の祕事で、恐らく兼良から始められた事と思はれる。連歌師宗祇は兼良から源氏の祕說を受けた。宗祇の不審抄出といふものは、花鳥以外の祕說について兼良との問答を記したものである。(實隆公記に兼良自筆の源氏物語不審勘答といふものが見えてゐるが或は本書と同じものか)宗祇は文明九年頃から同十八年六月の頃まで、三條西實隆に此の物語を講じ、長享二年の春に三箇祕事の傳授をしてゐる。又文明十七年に德大寺家で箒木の卷を講じたが、其の講錄が卽ち雨夜談抄である。此の書は又帚木別註ともいはれてゐる。此の他にも宗祇には種玉編次抄の著もある。かくの如くにしてこれより源氏物語の研究は當時の歌學と同樣に多く連歌師の手に歸した。宗祇から其の門人の連歌師達の間に橋渡しをしたのは實に實隆であつた。此の頃又富小路俊通は紫明抄、河海抄、花鳥餘情との三書の說を合せて三源一覽といふものを作つてゐる。實隆は近衞家其の他所々に於いて源氏を講じたが、宗祇の門人肖柏に講じた講錄が卽ち弄花抄である。肖柏には更に一葉抄の著もある。なほ連歌師の手になつたものでは宗長の薄紫、宗碩の宗碩抄・源氏男女裝束抄、兼載の源氏物語抄・類字源語抄、永閑の萬水一露、宗二の林逸抄、紹巴の紹巴抄、昌林の休聞抄等があり、甚だ盛である。又實隆の子公條は細流抄を著はし、其の子實澄は細流に增補して明星抄を著はし、なほ九條稙通は孟津抄を著はし、何れも後世の學者に用ひられたが、近世の始め中院通勝が、從來の諸抄を集大成して岷江入楚を著はし、源氏研究の一時代を劃する事となつた。

此の時代に重んぜられた古典は源氏物語に次いでは伊勢物語である。此の物語も亦歌道の典據として定家以來愛翫せられて來た。定家は此の物語を三本書寫したが、世上に流布した證本は天福二年正月に寫した所謂天福本で、其の奥書は此の物語の根源、名稱の由來等についての定說と見られてゐた。古く在原滋春の伊勢物語髓腦や藤原經信の知顯集、作者の知られない十卷の抄などがあつたが、皆後世の僞撰であり、內容も杜撰極るものであつた。二條家でももとは是等の古註によつて講じてゐたのであつたが、古註の杜撰を貶けて眞に研究に着手したのは兼良に始まるといつてい〻。兼良は長祿の頃其の註釋の筆を染め、文明の始め奈良に於いてそれを推敲改編した。それが愚見抄である。宗祇は文明十七年の頃から三條西實隆を始め、諸所に於いて屢〻此の物語を講じた。延德の始め周防の山口に於いて講釋したものが即ち山口抄であり、其の門人肖柏が後土御門天皇の勅を奉じて撰進したものが肖聞抄であり、更に清原宣賢が大永二年に實隆の講談を聽いて記したのが惟淸抄である。恰も源氏物語の岷江入楚に相當するものは細川幽齋の闕疑抄で、これは三條西公條が幽齋の所領長岡で此の物語を講じた聞書に基き、惟淸抄を參考して編したもので、慶長元年二月に脫稿した。愚見、肖聞等の諸抄の說をも亦取捨し、岷江入楚の如く、此の物語に於ける諸抄の集大成である。

是等の三代集、源氏物語、伊勢物語は何れも歌道の樞要として研究せられ、古典其のもの〻究明の爲めではなかつた。當時此の他にも定家の小倉百首、詠歌大概も同じく歌道の爲めとして研究せられてゐた。これに反して我が國の最も古い歌集なる萬葉集は餘りに時代離れがしてゐたので、歌道の上にはそれ程重要視せられなかつた。歌よむ人の中にも「萬葉は見ぬ事」などゝいつたといひ、又「萬葉集をウツシテ、シカモ不レ似二其體一」などゝいはれてゐた。そ

れでも耽奇的或は好古的趣味から、又は進んで研究の爲めの研究として、本集も亦賞翫せられたのである。

萬葉集は平安朝の中期になつて已に古典となり、殊に假名文字發達の後には其の特殊の記載法が又研究を要する事となつた。古今集が編纂せられたのは、萬葉集の勝躅を繼ぐ意味なので、當時勿論萬葉集は讀まれてゐたのに相違はない。本集に始めて點を加へたのは、後撰集を編纂する時で、梨壺に候してゐた五歌仙の手になつたものだといはれてゐる。これを古點といふ。平安朝時代の末から鎌倉時代になつて本集を翫ぶ風が段々盛になり、本集の詞を下に据ゑて、所謂本歌取の和歌を詠む事が流行し、其の結果として、遂には鎌倉右大臣實朝の様な萬葉歌人が出る様になつた。かく本集が翫ばれたから、御堂關白道長以下多くの人が古點に漏れた歌に點を加へたが、それを次點といつてゐる。尋いで仙覺が出るに及んで、本集の研究に一新生面を開く事となつた。仙覺の事業は第一に本集の校訂であり、第二に訓點の完成であり、第三に注釋である。彼は將軍藤原賴經の命によつて、多數の傳本を對校して定本を作り、又寬元四年には古點や次點時代に訓み得なかつた歌都合百五十二首に新しい訓點を加へた。それを世に新點といふのである。更に文永六年には武藏比企郡北方麻師宇鄉政所に於いて注釋十卷を著はした。

仙覺の事業は校訂といひ、訓點といひ、又注釋といひ、何れも劃期的の偉業であるが、併し仙覺が出たからといつて、從來行はれてゐた本集の諸本や訓點等が忽ち姿を隱したわけではない。平安朝時代の末になつて、本集の非常に簡單な注釋や、分類、或は編纂時代に關する考證等の研究が行はれ、殊に御子左家の俊成には、本集編纂の時代に關する考證をした萬葉集時代考の製作があり、又其の古來風體抄には本集の和歌を多く品隲してゐる。定家には萬葉集長歌短歌說の著があり、其の子爲家には簡單なものながら萬葉集佳詞の著がある。一條兼良の小夜のねざめにも俊成、

定家、爲家などは、殊更に本集をもてあつかつたといつてゐる。萬葉集に關する御子左家學の詳細なことは、以上の著書以外にはあまり明ではないが、爲家の子孫、二條、冷泉の兩家では本集に關して互に異説を張つて爭つたといふ事が由阿の詞林集葉抄に見えてゐる。此の一流は鎌倉、室町の兩時代に於いて、歌壇に特別の勢力を有つてゐたから、其の萬葉學說も相當の權威を認められてゐたらう。而して仙覺の學風は六條家に似て精緻で該博であるが、二條、冷泉の萬集學說は其の祖俊成、定家に似て穩健なものであらう。そして此の一流の學說が稍教權的に固定したのに對して、仙覺のは新進の學說で、恰も新舊兩學派の對立の形勢であつたのだらうと思はれる。此の兩學派の學說を折衷して現はれたのが藤澤遊行寺の由阿である。

由阿は冷泉家の歌學を學び、萬葉集については仙覺の四代の祕傳を受けたといつてゐる。其の著に詞林采葉抄・拾遺采葉抄・靑葉丹花抄等がある。詞林采葉抄は集中の故事や難語を拔き、其の歌を擧げて註したもので、拾遺采葉抄は采葉抄に漏れた詞の簡單な注釋で、靑葉丹花抄は是も簡單な萬葉選釋である。是等の諸書の說は仙覺に基いてゐるのであるが、又御子左家の說をも折衷してゐる。由阿は貞治五年上洛して二條良基に本集一部を講義した。其の時に詞林采葉抄を良基に獻じ、又其の講義の時に出來たものが拾遺采葉抄である。かくの如くにして仙覺の說が漸く京都に普及して行つた。良基はこれより十五年の後、康曆二年に其の家に於いて本集を講じてゐる。

平安朝時代の末に本歌取の和歌が流行したが、次いで古歌題或は古歌の詞を取つて詠む一種の遊戲的技巧が行はれ出した。然るに伏見天皇は萬葉集の詞を取つて所謂萬葉句或は萬葉詞の和歌を侍臣と共に詠ぜさせられた。此の風は後にも行はれて、應永二十年十月に、後小松上皇の仙洞御所で、萬葉詞の當座百首の御會が催されてゐる。少し後の

事ながら、幕府では將軍義政の頃から毎年月次和歌會の會始には懷紙を萬葉書にしたといひ、甘露寺家に於いても萬葉書の懷紙を用ひたことが親長卿記に見えてゐる。又義政の子義尙は萬葉語句の和歌五十首づゝを勸進し、或は萬葉風體の十首和歌を勸進して百首の褒貶歌合を張行した。又後柏原天皇の大永二年には度々御所で萬葉語句の小賦物の御連歌があつた。

かういふ風に萬葉集を翫ぶ風が盛になつて來るにつれて、本集の書寫や貸借に關する記事が當時の記錄によく現されて來る。殊に應永の頃より次第に古典研究の曙光が輝き始め、其の傾向が後花園天皇、後土御門天皇の御治世の頃から一層顯著になつて來た爲めに、歌道の上には直接重んぜられなかつた萬葉集も、純粹の古典として研究せられる機運が向いて來たのである。將軍義尙は文明十八年に萬葉集の作者部類を廷臣に編纂せしめてゐる。又後土御門天皇は延德三年に中御門宣胤に命じて萬葉集の部類を編纂せしめられた。義尙の作者部類は脫稿したかどうか明ではないが、宣胤の部類は完成して萬葉集類葉抄と稱し、全部十八卷今日に傳つてゐる。

此の頃から又簡單ながら注釋の書が著はされてゐる。それが多く連歌師の手になつてゐる事は注意しなければならぬ。それには宗祇の萬葉抄、兼載の萬葉集之歌百首聞書、及び著者不詳の萬葉集目安等がある。萬葉抄は文明十四年、或は十八年の奥書のものがあるが、恐らく文明の初年に出來たものであらう。それは本集の選釋で、歌を假名に書き下し、一二行の簡單な注を加へ、或は注のないものもある。百首聞書は其の名の示す通り百首のみの選釋であるが、注は宗祇のよりも稍詳細である。萬葉集目安は又萬葉集難義とも或は萬葉集秘訣ともいはれ、簡單な語彙で、堯以の撰だといはれてゐる。

五　五山文學

明菴榮西が支那から禪宗を傳へてから、これに倣つて、法を求めて彼土に渡る僧侶が多くなつた。圓爾辨圓、希玄道元、無關普門、南浦紹明、寒巖義尹、心地覺心、無象靜照、古先印元等競うて入宋し、禪を學んだ。從つて支那に於いても我が國人の佛法を尊崇する事の極めて篤い事を知つて、蘭溪道隆、西澗子曇、無學祖元、一山一寧、兀庵普寧、大休正念、鏡堂大圓、石梁仁恭、靈山道隱、東陵永璵、淸拙正澄、竺仙梵仙、明極楚俊等相踵いで來朝し、爲めに我が國に禪風を大いに煽つたのである。宋滅び元興つて後にも、我が國からは雪村友梅、月林道皎、寂室元光、別傳妙胤、大拙祖能、別源圓旨、仁浩無涯、此山妙在、嵩山居中、中巖圓月、石室圓玖、性海靈見、愚中周及等の多くの緇徒が入元し、明の代になつても、なほ絕海中津、汝霖良佐、愕隱慧奯、觀中中諦等が入明した。緇流の往來の頻繁なのは、前後此の時より盛なるはなかつた。從つて彼の地の文物が非常な勢を以て流入し、我が國人は始めて宋以後の新しい文藝、思想に接し、文選か白樂天の文集以外に彼の國の文學を知らなかつたのが、玆に韓退之や蘇東坡、黃山谷の詩文のある事を知り、漢唐の訓詁の學より、更に宋の理學に接した。

榮西が歸朝するや、洛東に建仁寺を建て、臨濟禪を唱へたが、叡山の壓迫によつて、これを台密禪の道場とし、宋から道隆が來てこゝに住するに及んで、禪風大いに興つた。尋いで九條道家は辨圓を信じて東福寺を建て、鎌倉では北條時賴が道隆を聘して建長寺を建て、時宗は元僧祖元を辟して圓覺寺を建てた。かく武家は專ら禪宗に歸依するに

至つたが、公家に於いても、龜山天皇は東福寺の普門を崇敬遊ばされて、禪林寺の離宮を捨てゝ禪刹となされた。これが卽ち南禪寺である。かくの如くにして京都に建仁、東福、南禪、鎌倉に建長、圓覺等の巨刹があり、これを支那の五山の制に擬して我が國の五山と爲し、或は又南禪寺を五山の上となして、これに京都の萬壽寺を補つて五山と稱した。祖元の法嗣に高峰顯日があり、顯日の法嗣に夢窓疎石がある。足利尊氏は疎石を信じて、後醍醐天皇の御追福の爲めに、洛西に天龍寺を建てた。疎石の徒には俊豪多く、春屋妙葩、義堂周信、絕海中津、空谷明應等が輩出した。將軍義滿は永德三年に妙葩をして京都に相國寺を創めしめ、其の成るや、五山を京都と鎌倉とに並置し、京都では南禪寺を五山の上とし、天龍、相國、建仁、東福、萬壽を、鎌倉では建長、圓覺、壽福、淨智、淨妙を何れも五山に列せしめた。

來朝した宋元僧は何れも文筆に長けてゐたが、中にも特に文章を以つて稱せられたのは寧一山を推さなければならぬ。以前より入宋求法した我が國の沙門は宗乘に心を傾けたらうが、風騷の事には必ずしも深く意を注いだとはいはれない。一山の來朝してからは、其の風を受けて、我が國の叢林には多く詩文の雄才を生じた。虎關師錬は桃溪德悟、無隱元晦、約翁德儉、寧一山等に歷侍すること二十餘年、博文宏才、頗る內外の事に通じ、未だ足は彼の土を踏まなかつたが、韓退之の文章を法とし、極めて雄偉、當時緇徒の作る所の四六駢儷文の弊を論じて、これを禁ぜんとした。其の集に濟北集二十卷がある。雪村友梅も一山を敬してそれに侍すること數年、夙く海を渡りて元に入つたが、恰も仁宗の治下で、文永、弘安の事によつて疑を蒙り、捕へられて獄に投ぜられたが、「百城煙水一枝筇、觸目無㆑非㆓是幻空㆒、童子曾參無㆓厭足㆒、鑊頭爐火起㆓清風㆒」との偈を誦し、水火の下に從容として色を變へなかつた。纔に極刑を免れ

て蜀に流されたが、途に偶作十首を賦して志を述べた。關西に在る事十年、大赦によつて長安に歸る。此の間に作つた所の詩は卽ち岷峨集である。彼土に留る事前後二十餘年、頗る其の風に熟し、作る所の詩文は皆其の地の韻で、人をして「舌本瀾飜、換骨奪胎、人外國の客たるを知らず」と評せしめた。

叢林の文學は夢窓門下の龍象義堂周信、絶海中津が出て最も光輝を發揮した。義堂も亦海を渡らなかつたが、宋の契嵩の鐔津文集や、杜甫、東坡の二集を宗とし、頗る多作で、其の集に空華集二十卷があり、明の詩僧全室宗泐をしてそれに序せしめた。全室は彼の詩を評して「雄壯健俊、幽遠古淡、衆體皆具す」といひ、又「友人信義堂、禪文偕に熟し、餘力に詩を學ぶ、風騷以後の作者、商參して之を究め、最も老杜老坡二集に於いて、之を讀み焉を稔ひ、而して胸中に醞釀すること既に久し」といつてゐる。本朝高僧傳の記す所によると、明の詩僧琦楚石は彼の稿を見て「是れ中華の者の作る所である」といひ、更に人の義堂の作であると告げるに及んで、歎じて「意はざりき、日本に此の郎あらんとは」といつたといはれてゐる。彼自らも其の日記空華日用工夫集中、空谷明應の書翰を引き、明の使節が其の序跋等の文稿を見て、稱揚口を極めたといふ事を記してゐる。本土の支那人をして感歎措く能はざらしめた所から見ても、彼の詩文の逸品であつたことが知られる。絶海は入明して全室に師事し、詩に於いても其の感化を受けたが、其の思を潛めた所は唐詩である。明の洪武九年、太祖皇帝に謁し、制に應じて熊野三山を詠じ、「熊野峯前徐福祠、滿山藥草雨餘肥、只今海上波濤穩、萬里好風須ニ早歸一」といひ、太祖は卽ちこれに和して「熊野峯高血食祠、松根琥珀也應レ肥、當年徐福求ニ僊藥一、直到ニ如今一更未レ歸、」との御製を賜はつた。其の詩集蕉堅藁に序した明の僧錄司左善世道衍の文に、彼の詩を稱して「清婉峭雅、性情の正に出づ、晋唐休徹の輩と雖も亦之に過ぐる能はざる也」

といつてゐる。蕉堅藁收むる所は空華集の如く多くはないが、吟詠の幽婉なるは義堂に數歩を超えてゐる。絶海と共に入明し、同じく歸朝した汝霖良佐も彼の土に於いて巨匠に就いて文章を錬つた。大儒宋景濂は其の文章を閲して大いに之を賞し、其の後に跋したといふ。

義堂、絶海を唱首とする當時の騷壇は實に華々しい蘭菊の芳を競うた有様であつた。彼等は多く五山に據り、これに對して大徳、妙心の大燈國師の法流では、寧ろ雕蟲の末技に刻苦することを快しとしなかつた觀があり、又曹洞派の人々には文名のあるものは乏しかつた。されば後世當時の文學を稱して五山文學といふ所以である。五山の文學は此の兩雄の時を以て最頂點として、其の後は下り坂に向つた風がある。此の後には得巖惟肖、江西龍派、瑞溪周鳳、希世靈彥等英傑の名があり、景徐周麟、横川景三、蘭坡景茝が出たのを最後として、頓に衰頽の期に入るのである。入明の沙門も應永の中頃からは法を求める者がなくなつて、貿易船に乘つて明國に使する商人か、外交官の様なものが多くなり、其の詩文は多く外交用の文書を起草するか、拈香、火語等、其の他佛事用の偈頌を作るに供せられ、其の末流のものはたゞ徒に字を馳り文を舞はすのみとなつた。此の頃になつて注意すべき出來事は、新に注疏の學の興つたことである。卽ち桃源瑞仙は史記鈔、周易鈔を作り、太岳周崇は前漢書鈔を作り、江西龍派は東坡詩鈔を作つた。尋いで萬里集九には山谷の詩を注した帳中香があり、笑雲清三には古文眞寶鈔がある。かゝる注疏の學が卽ち近世の儒學の濫觴となつたので、近世儒者の祖ともいふべき藤原惺窩や、或は山崎闇齋も亦禪僧落であつたことにも、其の邊の消息を漏らしてゐる。

禪宗の勃興と共に、當時支那に行はれた所の新しい儒學思想も亦隨伴して輸入せられた。いふまでもなく宋代に於

いて周濂溪、程明道、程伊川、朱晦庵等が出て、漢唐の訓詁の學に對して、天命性理を究める所謂理學が行はれた。此の新思想は延いて儒學の隆盛を促がした。且つ當時は儒者と佛子と互に相接近して禪僧の間にも儒學思想に薫習するものが多くなつたので、來朝した宋元の禪僧も、又彼土に渡つた我が求法僧も、競うて此の新しい宋學を齎したのである。蘭溪・兀菴・一山・明極・梵仙等の語錄には何れも儒子の口吻があり、我が國にても中巖圓月は中正子を著はして宋儒の說を述べ、義堂は足利義滿、二條良基等の問に答へて、儒學に於ける新古の二義を辨じ、且つ宋學の意を說いてゐる。天台宗の僧なる玄慧法印も夙く新學を倡へ、後醍醐天皇及び左右の侍臣の間に之を說いて、所謂禁裡様の儒學を創めた。北畠親房も亦其の影響を受けた一人である。かくの如くにして宋學は廣く我が國に行はれ始めた。かゝる流行に對して、朝廷の菅江南式四家の儒家は之に反對し、又虎關の如きも、宋儒が佛教を詆訾するのを怒つてこれを貶けた。永和の頃、常陸に資中といふ禪僧があつて、身沙門にして、口に儒典を讀み、諸佛の徒を教壞して邪見を起さしめたので、義堂は怒つて末世附佛法の魔であるといひ、關東管領足利氏滿に請ひて禪徒をして資中の門に學ぶことを止めしめた。併しながら大勢は動し難く、應永の改元の時に、年號の擧奏に新注を用ひて物議を醸したものもあり、又遂には朝廷の儒家も陽に新注を講じる様になつた。應永以降は五山の緇徒は佛子といふよりも寧ろ儒士に近い觀があり、其の奉ずる所はいふまでもなく程朱の說である。就中東福寺の岐陽芳秀の如きは四書の集注を講じて、且つ之に和點を施し、其の門下の雲章一慶の如きも程朱の說を引いて百丈清規を講じてゐる。後に桂庵玄樹が出て文明年間に大學を出版し、又家法和點を著はして訓法を論じた。桂庵は薩摩に入り、同國には其の後四書に文之點を施した南浦玄昌等出で、南國の文運に貢獻した。土佐の南學の祖といはれる南村梅軒も桂庵の學を受けたものとい

はれてゐる。

六　歴史文學と戰記文學

こゝにいふ歴史文學といふのは、歴史的事件や歴史的人物に假託した文學、卽ち所謂歴史小説などの類を指すのではなく、又たゞ事實を記す事のみを主意とする所謂史書でもなく、歴史的事實を特殊の結構を假りて、面白く讀ませる爲めに、興味本意に記述した讀物をいふので、古くはこれを「世繼」といつたらしい。平安朝時代の末に御堂殿卽ち道長の繁榮の由來を雲林院の菩薩講に參詣してゐた世繼といふ老人の口を假りて記した大鏡が出てから、次々に其の體に倣つたものが現はれた。鎌倉幕府時代の始めに中山忠親の作といふ水鏡が出た。これは厄年の初午に岡寺に詣で、修行者から葛城の仙人の物語を傳へ聞いたといふ形で、大鏡の以前を補足したものである。大鏡は、帝王の御上は文德天皇から後一條天皇まで、臣家は冬嗣から道長まであるが、水鏡は神武天皇から仁明天皇まで帝王のみを記してゐる。尋いで土御門通親の作ともいはれてゐる今鏡が後一條天皇から高倉天皇までの間を記して居つて、それは長谷寺で老女から聞いた物語の樣子になつてゐる。これを又續世繼ともいつてゐる。此の後藤原隆信が彌世繼といふものを書いて、後鳥羽天皇の御在位の頃までを述べたといふ事である。これは今傳はつてゐない。かういふ世繼が次々に現はれて、「假名の日本紀」卽ち童蒙の爲めの國史として廣く讀まれた樣である。當代になつて此の彌世繼の後を繼ぐ爲めに書かれたものが卽ち增鏡である。

增鏡は嵯峨の淸涼寺で老尼から聞いた事として、後鳥羽天皇から後醍醐天皇の建武の御一統までを記してゐる。大鏡は帝紀と列傳とがあり、水鏡は帝紀のみで、今鏡は「すべらぎ」と「ふぢなみ」とに別ちて、大鏡の樣に帝紀と列傳とがあるが、「雲居」とか「子の日」とかの標目を立てゝ、事件本位に記してゐる。幾分記事本末といふ風である。增鏡は帝王の御上の事のみであるが、事件本位の記し方は今鏡に似てゐる。そして文章は大鏡が最も興味本位に面白く書かれてゐるが、水鏡も今鏡も簡明に過ぎて興味に乏しく、增鏡は此の點に於いては大鏡に次ぐものである。併し事實の正確さは大鏡に遙かに超えてゐる樣である。

增鏡の著書は古くから一條冬良であるといはれて來たが、內容が建武御一統で終つて居り、從來歷史物は水鏡や秋津島物語は別だが、大抵其の內容と餘り遠くない頃に出來てゐるので、冬良としては餘り隔り過ぎる樣に思はれる。其の上に應永九年書寫の奧書のある本があり、其の書の本批に永和二年の年號が見えてゐるので、冬良の著としては未生以前の筆といはなければならぬ。そこで著者を其の祖父なる經嗣に當てる說もあるが、確な據所もない。文學博士和田英松氏は內容から大覺寺統の方人の筆になつたもので、恐らく二條爲明の筆になつたものではなからうかといはれてゐる。

增鏡の後に彌增鏡といふものがあつたといふ事である。これには稱光天皇から後柏原天皇の御事が見えてゐたといふから、增鏡の後を繼いだ世繼物がなほ二三種あつたらしい。又水鏡の以前卽ち神代を書き足したものに秋津島物語といふものも出來た。それのみならず、此の世繼物の影響は足利尊氏を中心として、南北朝の戰亂の跡を書いた梅松論や、關東の上杉禪秀の亂の事を書いた旅宿問答等にも及ぼしてゐる。又尊氏の三十三回忌法華八講の事を書いた和

久良牛の御法、二條良基が後光嚴天皇御七回聖忌法華懺法の事を書いた雲井の御法、一條經嗣の書いた相國寺塔供養記、一條兼良が享德二年の御鞠の事を記した雲井の春など、何れも老人、尼、女房等の物語に假託して記したのも、亦此の間接の影響と見る事が出來る。

戰爭の物語は事件の華々しいのみならず、忠孝の節義、人生の悲哀等、最も複雜な內容を有つものであるから、又人の感興を惹くことも大きかつたのである。されば鎌倉時代に於いては琵琶法師の切々たる訴へる樣な哀音によつて、數々の戰爭の物語が琵琶に合せて語られた。普通に四部の合戰狀といつて、保元、平治の物語、平家物語、承久合戰記等が語られたといふ事である。特に最も多く語られたのは平家物語であつた。此の琵琶法師は元來は卑賤な乞丐の徒であつたが、此の時代になつて、稍社會的の地位が認められ、檢校、勾當等の階級的な制度も出來る樣になつたが、一方其の技藝の方面は段々固定して行つて、唯平家物語を語るだけになり、遂には一部平家を完全に語り得る法師が次第に少くなつてしまつた程である。此の時代は戰亂相踵いで起り、戰爭物語の材料は鎌倉時代に或は數倍してゐるのであるが、琵琶法師の藝が固定してしまつてゐたから新しい合戰狀の新作して語られる事がなかつたのである。女の盲人が鼓に合せて曾我物語を語つてゐたことは、此の時代のものに少々見えてゐるが、それも合戰の物語を語つたことは物に見えてゐない。併し戰爭の事は人の心を惹くものであるから、それを物語る一種の藝人が現はれて來て、それが又新しい戰記文學を作つたのである。後崇光院法皇の御日記看聞御記によると、應永二十三年の頃に伏見の大光明寺の客僧に物語の上手があつて、召によつて山名奧州謀反の事一部を語つたといふ事である。山名奧州の謀反といふのは、明德二年に山名陸奧守氏清が將軍義滿に叛して京都の內野で戰つた所謂內野合戰であつて、それを記した

ものが明德記である。山名奥州謀反事一部とあるのは此の明德記一部を指されたものであるのに相違はない。卽ち物語法師が華々しい太刀打や哀な討死の樣子などを節面白く物語つたので、それを書きつけたものが明德記で、尋いで應永六年大内義弘が和泉の堺に籠城した時の戰物語なる應永記なども出來たのであらう。應永記は又堺記ともいはれてゐる。應永七年に信濃更科郡布施鄕大塔の合戰を記した大塔物語も亦其の一種であつて、其の内に守護小笠原長秀に扈從してゐる頓阿といふ遁世者は、物語は古山の珠阿彌が弟子で、辯舌宏才は師匠をもどく程の上手であると見えてゐる。されば物語法師の戰物語も夙くから專門の藝となつてゐたことが知られる。かういふ戰記文學は物語の法師の作で、そしてそれを面白く物語つたものか、或は他に作者があつて、法師はたゞそれを面白く物語るのみであつたか。此の問題に對しては明答を與へる材料はないが、恐らく謠曲などゝ同樣に、法師自身の作であつたらうと思ふ。

戰記文學中の最傑作、否、寧ろ當代最大の文學であり、永く後世に誇り得るものは太平記である。太平記は人も知る如く、正中の變から、細川賴之が上洛して足利義滿を補佐し、執事の職に任ぜらるゝまで、南北朝五十年の亂離を叙したもので、宮方と武家方との合戰が其の骨子をなしてゐるのはいふまでもないが、我が國及び支那の治亂興亡の前蹤から、君臣の義、父子の情、夫妻の愛別離の苦などまで、或は堂々と、或はこまやかに、多趣多樣で、行文も亦華麗である。誠に當代に於ける最傑作であるのみならず、後世永く愛讀せられ、種々の點に於いて非常に大きな影響を文學及び道義の上に與へた、實に貧弱なる當代文壇に於いて、獨り氣を吐くものといふべきである。

本書の作者は太平記評判といふ書に、玄慧法印其の他の人々の作といふ事になつてゐるが、少しも證據のない說である。洞院公定の日記に小島法師といふ人の事を記して、「是近日天下に翫ぶ所の太平記の作者なり」といつてゐるの

で、近時は多く此の記事に從つて、作者を小島法師と定めてゐるが、其の小島法師といふのはどういふ人なのか明に知られてゐない。或は兒島高德ではないかといふ推測說もあるが、もとより根據のない事である。今川了俊の難太平記に、「此の記の作者は宮方深重の者にて」といつてゐる。なるほど始終宮方に對しては同情の筆を執つてゐるから、其の方人かとも考へられない事もないが、併しこれは王法の尊嚴を信じる作者の信念、否一般の常識からの當然の態度で、又每度必ずしも徹底的に宮方に左袒してゐるわけでもなく、建武の新政に對しては手ひどい非難をも加へてゐるので、他にかういふ例も決して稀ではない。又山門に好意のある書き方であるから、彼は山徒かといふ說もあるが、それも如何にもと同意し得る程慥な根據もない。山門に好意のあるといふのは宮方と山門との關係に基くのと、且つは佛法の威力を信じる當時一般の考へ方にもよるのであり、特に山門贔負といふ程の書き方でもない。唯當時戰爭の物語を業とする物語法師があつたことが認められるとすれば、彼等は此の五十年の長きに亙る、且つ全國的な合戰を全く棄て去つて顧みないわけもないから、太平記も或は彼等の手になつたもので、從つて小島法師といふのも、さういふ藝に携はる人なのであつたのではなからうかとも想像せられる。併しこれは是以上の材料がないのだから、今直に決定的な判斷を與へることは困難である。

難太平記によると、法勝寺の惠鎭上人が太平記三十餘卷を持參して足利直義に見せ、直義はそれを玄慧法印に讀ませたといふ。これには太平記三十餘卷とあるが、現行の本は普通には四十卷になつてゐる。勿論三十餘卷の餘の字が甚だ曖昧な上に、卷數の分合も有勝な事故、此の卷數の相違といふ事は或はそれ程意味のある事でもないのかも知れない。併し流布の本は前にも述べた樣に、直義死後の義滿の代の事まであり、或る程度の書き繼ぎが行はれた事は明

で、了俊も亦近代重ねて書續けりといつてゐるのである。それのみならず以前の三十餘卷の本も必ずしも小島法師一人の手になつたものかどうかも明瞭でない。仔細に見れば全編少からず矛盾があり、又多少の不統一の感もある。第一卷に中宮後京極院入内の條に「一生空しく玉顏に近かせ給はず」とあるかと思へば、第四卷の「中宮六波羅に行啓の事」といふ樣な記事もある。是等の矛盾は先賢の已に指摘した所である。されば一部の太平記は通じて一人の手になつたものではあるまい。これは太平記が物語法師の語り物であると見れば自然に會得出來る事で、全體よりも一段一段の面白さの方が必要だつたのであらう。併し通じて見れば、矛盾の間にも一貫した條理があり、不統一の間にも一つの綴りがある。殊に文章は大體に同じ感じで、恐らく次第に洗錬統一せられたものであらう。

太平記の記事に誤謬のあることは難太平記にも指摘してゐる。一時は太平記は史學に益なしとまでいはれた。これは一つの小說で、歷史の書物でないといはれたが、大體に於いては當時の正確な記錄の記事とも一致するので、近頃は却つて史學者の間にも餘程信用を恢復して來た。隨分高名の人々も且勢ぞろへばかりに書入れたるもあり、一向略したるもあるといひ、尊氏が九州に逃げ下つた時、從つて行つた人も、多く名字を入れてゐないといふ樣な非難は、寧ろ誤謬といふべきものでなく、何れの書物にも有勝な事である。定めて末梢的な誤謬は當然あつたであらう。難太平記にいつてゐる樣な人の所望によつて高名話を書き入れた樣な事も或はあつたかも知れない。併し太平記は事實を傳へる嚴密な意味の歷史書ではなく、讀者或は聽衆の興味を呼び起すことを目的としたものであるから、これに嚴密な正確さを求める方が最初からよろしくないのである。

最初にもいつた通り、此の時代は實に合戰の多い時代で、應永の堺の亂の次には、東國に上杉禪秀の亂があり、鎮

西には大内と大友との爭があり、永享には鎌倉の足利持氏が亡び、嘉吉元年には將軍義教が弑せられて播州の征伐がある。これからは幕府の權威漸く薄く、寛正には兩畠山の爭があり、それが遂に應仁元年になつて所謂應仁の亂となつた。かくて全く世相一變して亂世、戰國となつてしまつて、到る所劍戟の響が耳朶を襲つたのであつた。從つて是等の合戰の事を記したものは永享記、永享後記、結城合戰繪詞、嘉吉記、長祿記、新撰長祿寛正記、文正記、應仁記以下殆ど枚擧に遑ない有樣である。かういふ戰記物の中には底倉記や中古治亂記の樣に後の時代の編纂と思はれるものもあるが、概ね其の事件に餘り遠く隔たらない時に書かれたものが多く、何れも多かれ少なかれ、太平記の影響を受けてゐる。

七　物　語

物語卽ち小說は平安朝時代に非常に發達して宇津保や源氏の樣な大作にして而も傑作が現れたが、鎌倉時代には却て衰頽して短篇の摸倣作が出たに過ぎなくなり、此の時代にはそれが一層甚しくなり、はか〴〵しい摸倣作も出なくなつた。平安朝時代から短篇の物語は繪物語といつて、繪卷物の形になつてゐたが、此の時代の物語も亦大方は繪物語で、草子になつてゐたものは極めて少かつた樣であり、又草子になつてゐても多くは繪草子で、奈良繪本の樣に所々に挿繪があつたのである。繪卷物は自然に內容が小さくなり、纒つた物語は收まらなくなる上に、物語の鑑賞よりも繪の鑑賞の方が主となり、物語は唯繪の說明に終る樣なものさへ出來た程であるから、此の時代の物語は概ね極め

て小篇である。從つて規模も頗る小さく、且つ類型的で、同じ様な物が多い。又描寫も表面的で、多く唯筋を運ぶに過ぎず、文章も素撲で、全體に幼稚の感を免れない。

物語の内ではやはり戀愛小說が多數を占めてゐる。それにも同じ型のものが多く、落窪物語の樣な繼母に苦められた姬君が、高貴の人に思はれて後に榮えるといふ筋のものでは、小落窪、秋月物語、岩屋の草子、鉢かつきの草子などがあり、小落窪は落窪物語を今樣に短く改作したものであらう。又觀音の利生によつて好配を得るといふ筋のものでは、初瀨物語、雨やどり、今宵の少將物語、物臭太郎等があり、其の他何れも圓滿に局を結ぶことになつてゐる。忍音物語は古物語めいて、當代の戀愛小說の內では最も出色の作であらう。左大臣の男四位の少將公恒は嵯峨野のあたりで美しい中務卿の宮の姬君を見初めて、それに通ひ、京都に迎へて、遂に若君をさへ儲けたが、父の左大臣は公恒を左大將の婿にするといふ婚約を結んであつたので、これを悅ばず、强ひて大將の女の許に通はせ、中務の宮の姬の產んだ若君を引き取つて姬を追ひ出し、姬は止を得ず親しき內侍のすけの許に身を寄せた。公恒は後に此の事を知り憂悶して日を送つてゐる內に、帝は內侍のすけから姬の事を聞きこしめしてしきりに召させられたが、姬は公恒の事を思つて召に從はない。公恒はまたそれを知り、父の事又は我が子の行末を慮つて橫川に遁れて出家してしまふ。姬も遂に逃るゝ所なくして內に參り、后立し、春宮や數多の皇子を上げ、公恒の入道の子は春宮と一つ腹であるといふので帝も御寵愛あり、中將となり、後山路を分けて橫川に父の入道を訪ねる。終には中納言に進み、太政大臣の中君に通ひ、思ふ事なく世を送つたといふ筋である。此の物語は源氏物語を摸したものであらう。其の名は既に八雲御抄や色葉集に見えてゐるので、鎌倉時代以前の古物語らしく思はれるが、詞づかひ其の他から見て、古い忍音物語と

は別のもので、此の時代の作であらうといはれてゐる。黑川春村も文明頃の作かといつてゐる。これには小夜ごろも等の類作も少くない。なほ源氏物語を摸したと思はれるものには兵部卿物語もあり、西行物語を摸したと思はれるものには朽木櫻といふのがある。又注意すべきは李娃物語で、これは唐の李娃傳を飜案したものだが、飜案の跡極めて露骨で、又文章も原文の影響を受けて甚だ生硬である。

當代の特色と思はれるのは男色物語の非常に多いことである。それには秋の夜長物語、松帆浦物語、鳥部野物語、幻夢物語、嵯峨物語、辨の草子、足引等が數へられる。其の內でも足引は最も興味の深いもので、山門東塔の僧侍從君玄怡といふもの、白川の邊にて奈良法師の若君と契り、若君は父の許を得て登山しようとしたのを、繼母がそれを妬んで、夜の內に其の髮を切つてしまつた。若君はそれを恥ぢて修驗者の弟子となり、少將と名告つた。玄怡はその事を知り憂悶して病を得、山を下つて療養し、修驗者に祈禱を賴まうと其の許へ行つた所が、量らずも戀しき少將に逢ひ、非常に悅び、病も頓に癒えて、相共に叡山に歸つた。かくて兩三年して奈良の父の許を訪れようと相伴うて奈良に下つたのを、繼母がそれを聞き、惡黨を語らつて手搔門の邊の宿所を襲はせた。侍從君は「奈良法師などいふものに、見逃げ聞逃げしたらんは、山門の瑕瑾たゞ此事にあるべし」と、たしかりの積刀法師、後見せずの旋陳法師、法定なしの武王丸、かへり宣旨の金剛丸などと共に、力戰して惡黨どもを亡ぼした。其の後少將は東南院の師跡を繼ぎ、玄怡も山門に於いて重要な位置に榮達したが、遂に俗塵の交を避けて大原に逃れ、又高野山に登り、谷の奥を見廻り、とある庵室を訪れた所が、それは少將が志の遂げざる事から俄に隱遁の念を起して、こゝに行ひすましてゐるのであつて、量らざるに邂逅して共に修行を怠らず、めでたき最後を遂げたといふのである。此の物語は五卷から成

り、看聞御記を窺へば、叡山では永享八年に、此の繪卷を新寫して、後花園天皇、後崇光院法皇に繪詞の宸筆を奏請した事が見えてゐる。恐らく當代の初期に山門方の僧侶の手になつたものであらう。

又當代に多く行はれたのは源義經に關するもので、義經記、辨慶物語などを始めとして、其の一生の一部分の事を敍したものでは、十二段草子、御曹子島わたり、鬼一法眼などがある。なほ佛教の勸化の爲めに作られたものには三人法師物語、勸學院物語、小町草紙などがあり、小町草紙には經典の流通分の樣に、卷末に「此ものがたり聽く人、まして讀まん人は、すなはち觀音の三十三體をつくり供養したるにひとしきなり、小町はによいりくわんおんの化身なり、又業平は十一めんくわんおんの化身なり、あたにもこれをおもふべからず、なむたいじくわんおんぼさつとゐかうあるべし」といふ風な文句がある。其の他にも「この物語をきく人は、常に觀音の名號を十返づゝ御となへあるべきものなり、南無大慈大悲觀世音菩薩、たのみてもなほかひありやくわんぜおん二世あんらくのちかひきくにも」など、此の樣な事を書いたものも少くはない。以て當時物語作者の意樂を察することが出來る。なほ又本地物といはるゝ一類があつて、例へば賀茂の本地、貴船の本地、熊野の本地、天神本地、嚴島御本地、釋迦の本地、毘沙門の本地、弘法大師の本地、中將姫の本地などの類である。是等も又一方は勸化の爲めでもあり、又一方には童蒙に神佛の本緣を敎へる爲めでもあつた。

今日に於いても繪本は主として子供向きのもので、從つて其の內容は敎訓物か、或は輕い滑稽物か、又は擬人的な諷刺物が多い。此の頃に於いても又繪卷物や繪草子には小兒對手のものが多かつたらうと思はれる。百姓耕作の繪卷、或は二十四孝など敎訓的なものは、德川時代の假名草子の先驅をなしたものとも見られる。又福富草子、文正草子、

常盤嫗物語、梅津長者物語、大悦物語などの目出たい滑稽物もあり、なほ畜類や器物等を人間に擬して戯作した擬人の物語は甚だ多い。一休禪師の作といはるゝ佛鬼軍は佛菩薩と無明煩惱との合戰に仕立てた物語で、古く行はれてゐた無明法性合戰狀と殆ど大差のないものである。精進魚類物語は又魚鳥平家ともいはれ、平家物語を摸して作つたもので、尋いで鴉鷺合戰物語が出たが、何れも一條兼良の作と傳へられてゐる。勿論其の證據はないのである。十二類繪詞は藥師十二神將の使者たる十二支の鳥獸が歌合の判者の事から爭を起して合戰をするといふ筋のもので、墨染櫻も芒と梅との櫻に對する戀の爭から木と草との戰になる筋である。戀物語では木幡狐、鼠の草紙、のせ猿草子、かほよ鳥の草子、玉蟲の草子等があり、又畜類の歌合に仕立てたものでは鳥歌合、蟲歌合、こほろぎ草子などがある。付喪神は古い具足の妖物どもが長坂の奥に集つて、氏神變化大明神の祭禮を行つてゐた所へ、關白參內の行列に行逢ひ、尊勝法によつて調伏せられ、遂に發心して、珠數の變化一連法師の化導によつて佛道に入るといふので、其の他にも鴉鷺合戰物語、木幡狐など、畜類等が無常を觀じて佛道に入るといふ風に作つたものが甚だ多い。

此の時代の物語が近世になつてもなほ童蒙の讀物に供せられ、次第に開板せられて行つた。又十二段草子や梵天國などが古淨瑠璃の語り物になつて、殊に淨瑠璃節といふ名が十二段草子に基いてゐることは世に普く知られてゐる所である。是等の物語の內左の二十三種を纏めて刊行して、それを御伽草子といつた。其の目錄を示せば

文正草子	鉢かつき	小町草子	御曹子島わたり
唐絲草子	木幡狐	七草草子	猿源氏草子
物臭太郎	さゞれ石	蛤の草子	小敦盛

二十四孝　梵天國　のせ猿草子　猫の草子
濱出草子　和泉式部　一寸法師　さかき
浦島太郎　酒顚童子　横笛草子

である。なほ此の内には猫の草子の如く、「一まづけうちやう(慶長)七年八月中旬に」と慶長といふ年號の見えてゐるものもあるから、一二近世初季のものをも含んでゐるであらう。其の名の御伽といふのは、貴人の左右に侍して御話對手をする事で、諸侯の內者に御伽衆のあつた事や、御伽をする盲法師の事が其の頃のものに見えてゐるが、此の御伽草子は多く小兒の爲めの讀物であるので、後世小兒對手の話を御伽話といふのは此の邊に端を發してゐるのであらう。

八　猿樂の能

猿樂は元來支那の散樂を輸入したものである。散樂は正樂に對する稱呼であつて、一定の樂を指して呼ぶものではない。支那の正樂は部伍があつて、多數のオーケストラの伴奏によつて、隊を組んで舞つたのであつたが、散樂は部伍のない一切の種々雜多な俗樂を總稱したものである。部伍の無いといふのは規模の小さい事で、又低級といふ事を意味するのであらう。從つて卑俗であり、猥雜であり、又滑稽をも主としたのであつた。散樂には舞樂のみでなく、手品、輕業、手遊びの様なものまでも含まれ、笛、太鼓の囃につれて、手品、輕業などが行はれ、且つ歌舞せられたのである。支那では頗る古くから行はれたらしく、莊子の徐無鬼の篇や、文選の西京賦、隋書唐書の音樂志、唐會要等

に其の記事が見えてゐる。それによれば跳丸、跳鈴、擲劍、弄枕等と稱せられる品丸或は刀玉式のものがあり、透梯といはるゝ籠抜式のものがあり、又緣竿といふ竿登りや、戲繩、高絙、走索などゝいはるゝ綱渡りの様なものがあり、猿舞はしや猛獸遣ひ、人形遣ひ、或は幻術、馬鹿囃子、果ては獨樂や輪鼓の曲藝なども含まれてゐた。

我が國にはそれが隋唐の正樂と共に輸入せられ、天平七年五月庚申に唐人が挊槍を奏したことが史に見えてゐる。挊槍は即ち弄槍で散樂である。又正倉院の御物に二張の彈弓があつて、其の一に黑漆を以て散樂の様子を描いたものがある。平安朝時代になつては、散樂御覽の事が屡史上に散見し、又相撲節會の後宴には必ず散樂が奏せられてゐた。當時の散樂は曲藝や舞踊の間に、今日の太神樂や萬歳の如く滑稽な口眞似などをして、専ら觀者の頤を解く事に力めたので、村上天皇御製の散樂辨にも、半蔀に騎つて鞭を擧げ、或は柱に傍つて胡簶を負つた衛府の官人か何かの眞似をした滑稽なしぐさのあつた事が見え、藤原明衡の新猿樂記には京童の虚座禮(そらざれ)や、東人の初京上りの様子を演じたり、同じ人の明衡往來によると、老人夫婦の卑猥な眞似をした事が見えてゐる。平安朝時代の中頃から、散樂といふ語は日本風に訛つて猿樂といひ、そして更に猿樂といふ語は又滑稽とか諧謔とかいふ程の廣い意味を有つことゝなり、又それを「さるがふ」と活かせて、洒落るといふ意味の動詞を作る様になつた。

平安朝時代の末になつて、猿樂系統の藝人の内に呪師といふ一種のものがあつた。鎌倉時代の初期にかけて、諸寺の修正會に呪師の行はれたことが見えてゐる。其の呪師とは龍天手、毘沙門手、鬼手などゝいつて、龍天や毘沙門や鬼の扮装をして舞つたものゝ様である。呪師のことを又呪師走ともいつてゐるが、走といふのは舞樂の方で勇壯活潑に舞ふのをいふから、呪師の舞は相當活潑に舞はれたものであらう。修正會には呪師の後に必ず猿樂が奏せられた。

其の爲めに呪師と猿樂とは次第に親族關係が出來たのである。法成寺の修正會に出勤する呪師に丹波呪師といふのがあるが、これは後世の丹波猿樂との關係を匂はせ、又同寺の修正會の佛供料は攝津の榎並庄に課せられたが、丹波猿樂三座の內に榎並座といふのがあるのは後世の猿樂と呪師との關係の甚だ密接であることを思はせる。又大和猿樂でも室町時代まで、呪師を舞ふことが物に見えてゐる。其の呪師といふのは今日能樂の家で最も神聖視する翁の事である。かく後世の猿樂といふものは或は呪師系統のものか、少くも呪師と密接な關係を以て發達したものである。鎌倉時代の猿樂の事は諸書に多くの記事があるが、其の樣子を記したものは殆どない。唯東大寺續要錄に「今ノ亂舞ハ是往古ハ猿樂ト云也」と見えて居つて、少くも亂舞の樣なものを猿樂といつた時代があつたことを想像させる。前にもいつた樣に猿樂は曲藝やら滑稽な物眞似の間に笛や太鼓で囃しながら舞つたものであつたが、それが儀式の場合に用ひられ、次第に古典化するにつれて、典雅な舞の樣な部分が著しく發達し、舞踊本位のものになつたのではなからうか。それが呪師などの影響で特に何かの扮裝をして舞ふ樣になり、遂には或る筋を脚色して、多少劇らしい傾向を帶びる樣になつたのであらう。兎に角、鎌倉時代の末の頃に猿樂の間にさういふ劇的な分子が發達して、それを藝能といひ、又略して單に能ともいつた。これ今日の所謂能樂の能である。

能の起源については今日まで色々の說があつた。世阿彌の花傳書には聖德太子が秦河勝に命じて六十六番の物眞似を作らせたのから起つて、村上天皇の御宇に、河勝の後裔氏安に天下の御祈禱の爲め紫宸殿で奏せしめたのに始るといひ、又猿樂傳記などによると、又村上天皇の御宇に佐渡へ流された智識の僧が十五章の舞の詞を作つて置いたのを、後嵯峨天皇の御宇に、大和猿樂の圓滿井に下されたのが今の能となつたといふ。かういふ舊說は深く問題とするに足

りないが、從來學者の間に最も勢力のあつたのは元曲起源說である。これは新井白石の俳優考や荻生徂徠の南留別志などから始まつた說で、隨分廣く信ぜられて來た。成程元曲の組織と我が能樂の組織とは一見非常に類似してゐる上に、我が國に能の發生したと思はれる時は、恰も支那では元時代に當るので、尤らしい說ではあるが、これには津田左右吉博士など有力な反對意見もある。我が國の能が支那の雜劇を學んだとすれば、それを輸入した經路を考へなければならないが、當時の事情ではそんな事が考へ得られない。又それには彼我の交通の衝に當つてゐた禪僧の媒介といふ事をも考へなければならないが、能の思想の上には禪宗風の氣分が少しもない。且つ元曲は戲曲の體を具へ、時間的に進行して行く筋があるが、能は敍事的で、又舞踊本意である。次に高野辰之博士が能と延年の舞の連詞、風流などゝ比較して、能の起源を其の邊に求められたが、延年の連詞等は故事や詩歌の詞などに關する掛合話の様なもので、全く舞踊の分子が認められない様であるが、能は筋よりも寧ろ舞踊が本位で、紅葉狩の能ではシテは戶隱山の鬼神である様に、能のシテといふものは、物語の主人公ではなく、舞踊の主人公即ち舞手である。それ程舞踊が本位になつて居つて、餘程延年の連詞や風流などとは様子の違つたものである。更にまた本居內遠などの様に、猿樂の能は田樂の能から來たものであるといふ說が稍廣く行はれてゐる。尤も田樂は鎌倉時代の末に非常に流行したことはよく知られてゐる通りであり、且つ猿樂の能よりも田樂の能の方が早く物に見えてゐる。祇園執行日記康永二年十一月二十三日の條に、同社頭に本座田樂の能のあつたことが見え、太平記には貞和五年六月に四條の橋を架ける爲めに有名な棧敷崩れの勸進田樂があつた事が見え、又今川了俊の落書露顯に祇園の勸進田樂に四匹の鬼といふ能をしたことが見えてゐる。それは文和二三年の頃の事である。然るに祇園執行日記には「猿樂兩三番」といひ、太平記には「日吉山王

ノ示現利生ノ新タナル猿樂」をしたといつてゐる。卽ち田樂の能の事を猿樂といつてゐるのであるから、能は猿樂の最も主要なる表藝で、田樂はそれを摸したものであることは明である。そしてこれによつて考へれば、猿樂に能の發生したのは康永や貞和などから相當に以前の事であつたらう。世阿彌が花傳書に能の起源を頗る古く說いてゐるのは、世阿彌の頃には能の發生當時の事が忘れられて、それから餘程經過してゐることを語つてゐるので、少くも鎌倉時代の末には能が出來てゐたらうと思はれる。併し其の時分の能といふものはどういふものであつたか明瞭には知られない。恐らく今日の能とは餘程違つたものであつたらう。

德川時代に歌舞伎に物眞似狂言が始められると、舞々や蜘舞などもそれに傚つて舞物眞似、蜘舞物眞似などが續出した樣に、此の頃も猿樂に能が發成すると、田樂もそれに傚ひ、或は獅子舞にも能が出來た樣である。そしてそれ等の能は大きく見れば大體に似たもので、互に影響しあつて發達したものゝ樣である。世阿彌の申樂談義にも例の棧敷崩れの勸進田樂の事を敍して、本座の一忠と新座の花夜叉とが戀の立合の能をしたといつてゐるが、此の本座田樂の一忠といふのは、當時の名人であつて、世阿彌は花傳書に「亡父はつね〴〵一忠が事を我風體の師なりとまさしく申し候也」といひ、又能作書に「古風には田樂の一忠、中比當流の先士觀世、日吉の犬王、是はみな舞歌幽玄を本風として、三體相應の達人也」といひ、或は申樂談義にも「一忠、淸次、犬王、龜阿、是たゞ道の先祖といふべし、彼一忠を觀阿はわが風體の師也と申されける也」とあり、卽ち本座田樂の一忠、近江猿樂の犬王等の名人の後に、結崎座の大和猿樂に觀阿彌淸次、其の子世阿彌元淸が出て、此の猿樂の能に一大革新を興し、以て今日の能樂の如き立派な藝術を完成したのである。

能の發成の順序はさういふわけであるが、然らば個々の能の能本卽ち普通にいふ謠曲は誰が作つたのであらうか。從來猿樂自身の作として、其の作者註文なども出來てゐるのを、近世になつてそれを疑つて、古く作者といふのは、謠の節付や能の振を付けた人なので、謠本の作者は別にあり、當時の歌人か連俳の徒、或は公家衆、又は五山などの僧侶の手に成つたものであらうといひ出して、それが一般に文學史家の間に通說になつてしまつた。然るに世阿彌の書いたものによると、やはり能は能大夫自身の作で、彼は能の創作に關する種々の用心や苦心、又は實歷談を語り、他流の猿樂と能競べ卽ち競演をする時には自作の能を澤山持つてゐるものゝ方が有利であるといひ、又子弟に能を作る心得を說いて和歌の素養の必要であることを述べてゐる。この和歌の素養の必要を說いてゐる所は謠曲の文章が多く古歌の綴り合せの觀のあるのと思ひ合はせて非常に意味が深いと思ふ。又謠曲の內には「松風」「求塚」「蟻通」「杜若」「井筒」「遊行柳」「江口」「西行櫻」など、古歌又は歌人を材料にしたものが頗る大多數を占めてゐるのも、此の點に考へ合はせられる。五山の僧といふけれども、彼等は支那の事ばかりで、日本の事を少しも知らない。謠曲に取材せられた支那の物語は僅に十指を屈するに足りない程で、又謠曲中に引かれてゐる詩の句は白氏文集か和漢朗詠集が主で、當時禪僧に悅ばれた黃山谷や蘇東坡の詩などは少しも見えない。又謠曲は頗る抹香臭いといはれるけれども、禪宗の思想は殆ど皆無で、僅に「殺生石」「自然居士」「東岸居士」など禪宗に關するものはあるけれども、それも少しも禪宗臭くなく、たゞ「放下僧」に禪法を好んで問答するといひ、又碧巖の句を引用してゐるのが幾分禪宗的であるばかりである。從つて五山の僧侶などの手では決して此の樣な謠曲は作れなかつたので、やはり最初から傳へられてゐる通り、能大夫自身の作と見て差支なかつたのである。

世阿彌の書いたもの丶内に古い能の名が色々見えてゐるが、今日には殆ど遺つてゐない。現存の能は觀阿彌以後の作のみで、其の十中の八九までは觀阿彌、世阿彌、今春禪竹等の大和猿樂の手になり、其の他近江猿樂の宮增や、丹波猿樂の榎並左衞門五郎などの作が少々あり、又公家武家の素人の作と傳へられてゐるものも幾分かある。其の內最も多いのは世阿彌のものである。群小能作者の作品も恐らく澤山あつたのであらうが、自然に淘汰せられて、傑作ばかりが今日に遺されてゐるのであらう。

猿樂は中頃から神社に附屬し、其の神事に用ひられて來たが、其の神事に奉仕する團體を座といひ、有名なものでは伊勢の大神宮に勤仕した伊勢、主司の二座（後には和屋、勝田、春王の三座）、大和の春日神社に屬したものでは外山（寶生）、結崎（觀世）、坂戸（金剛）、圓滿井（今春）の四座、近江の日吉神社に附屬するものでは山科、下坂、日吉の三座、法成寺の修正に參勤するものは丹波猿樂で、矢田（本座）、榎並（新座）、凩（法成寺）の三座があり、其の他にも宇治の守菊大夫、法隆寺の鉾藏猿樂など物に見えてゐる。此の內大和猿樂と近江猿樂とが最も有力であつて、謠の節にも大和節、近江節といつて對立してゐた。然るに大和猿樂の觀世座の世阿彌が將軍義滿に寵せられてから、觀世座、延いては大和猿樂が武家に用ひられ、元來猿樂といふものは非人同樣の卑しいもの丶樣に見られてゐたものが、それから著しく社會的地位を向上せしめ、遂には觀世座の稚童が將軍義尙に愛せられて、足利氏の一族並に遇せられる程にまでなつたので、斷然大和猿樂が優勢になり、他座の猿樂は次第に大和猿樂の內に吸收せられるか、或は亡びてしまつて、遂に近世には大和猿樂のみ遺つて所謂四座の猿樂となつたのである。又技藝の上から見ても大和猿樂は斷然他を壓して居つたので、それが自然に大和猿樂隆盛の原因をなしたのである。更に猿樂全體から見て、觀阿彌、

世阿彌が出た時が最も隆盛期であつて、尋いで觀世音阿彌、今春禪竹が出て其の技藝の發達が漸く固定し、これからは唯觀阿彌、世阿彌の昔を顧みながら、保守的或は守勢的な推移を遂げたに過ぎない。年代でいへは應永前後から寛正頃までが其の隆盛期で、應仁一亂以後漸く衰頽期に入つたのである。これからは能の新作も殆どない。たま〳〵三條西實隆などが、狹衣や閔子騫の能を新作したことがあつても、それは唯曲舞だけのものである。此の時代になれば、大和猿樂も他の諸座の猿樂も、皆觀阿、世阿等の舊作の能ばかりを繰返して演じてゐたのである。諸座の猿樂は神事能に出演するか、或は勸進能を興行して大衆に接してゐたのであつたが、武家其の他の貴族に寵用せられてからは次第に大衆に接する機會が無くなつた。然るに座外の身分の低い猿樂共があつて、さういふ者達が後世の辻能の樣に手輕に大衆の要求に應じて能を演じたので、それを手猿樂とも小猿樂ともいひ、其の演ずる能を手能といつた。其の演ずる所はやはり諸座の猿樂の演ずる能を借用してゐる。かゝる手猿樂の徒では西川、守山、鶴千代、澁屋、春同、山崎、吹田などいふものが物に見えて居り、天正から慶長頃にかけては虎屋といふのが聞えてゐる。又手猿樂の中には美しい女や奇麗な稚子をシテとする女房猿樂や稚子猿樂といふものがあつて非常に繁昌してゐた。

九　狂　言

猿樂の能と能との間に演ぜらるゝ一種の喜劇なる狂言は能に附隨して發達したものである。玄慧法印が百六十番の狂言を作つたなどゝいふ古い傳もあるが、もとより信用に足りない。元來猿樂といふものは滑稽を主としたもので、

其の内から舞踊が發達して遂に能になつたが、元の滑稽な分子が別に發達して狂言になつたものであると、一般に說明せられてゐるが、それも滑稽な分子がどういふ風にして今日の樣な狂言になつたのか、少しも明瞭にせられてゐない。實に狂言の出來上るまでの道筋を知るに足る材料は殆どないので、明瞭にする事の出來ないのは誠に止むを得ないのである。猿樂傳記といふ書には、翁の舞に供をして出る笑(をかし)といふものがあつて、祝言の後に目出度いことを面白く囃した。それが後の黑尉三番叟で、更に能の中でシテワキの對手をし、又中入の時に間の狂言となり、遂に筋を立てた狂言の能を始めたといつてゐる。此の書は俗書であつて、全く信用し難いものであるけれども、此の記事は世阿彌の書いたものや、古書の記事とも多少符合する所がある。舞樂の唐樂の安摩といふ曲には直ぐ續いて二舞(にのまひ)といふのが連舞せられるが、これは安摩の舞の眞似をして茶化す樣な仕科をするのである。田樂にもどきの手といふのがあつて、又田樂の刀玉や高足等の後に出て、其の眞似をして茶化す樣な風をする。御國歌舞妓には猿若といふものが御國について出て、御國が眞面目に舞つてゐる脇から滑稽な事をいつて茶化してかゝる。萬歲の才藏も亦さういふ意味のものである。これは見物の笑を求める爲めに種々の藝事に何れも自然に起る事で、猿樂の翁の黑尉三番叟も亦元來さういふものであつたと解しなければ、全く無意味な附隨物となつてしまふ。又尉三番叟は今日でも狂言方の職となつてゐる。今日の能で、能の中に出る狂言、卽ち「班女」の野上の宿の長、「安宅」の强力、「船辨慶」の船夫、或はシテの中入の時、前の出と後の出との間を結ぶ爲めに出る間の狂言、是等皆頗る生眞面目なものだが、世阿彌の書いた習道書の中には笑ひどめく事が職なる風體であるといつてゐる。元來狂言といふ詞は興言利口といふ事で、洒落をいふ事、人を笑はせる事である。能の狂言も亦田樂のもどきや歌舞妓の猿若の如く、能大夫が眞面目に舞つてゐる間に

交つて、道化た事をしたり、或は當意卽妙の洒落をいつたのであらう。世阿彌は狂言の役は或はざしきしく(？)又は昔物語などの一興ある事を本木に取りなして事をするといつてゐる。看聞御記によると、伏見の御香宮の猿樂に、狂言が公家人疲勞の事を種々狂言せしめたので譴責せられた。又仁和寺では聖道法師の事を狂言した爲めに御室から罪科せられ、叡山では猿の事を狂言した爲めに山法師から刄傷せられたといふ事である。是等は當意卽妙の狂言をしようとして却つて失敗した例である。此の狂言卽ちをかしといふものは田樂の能にもあつたので、世阿彌はつち大夫、後のつち大夫、田樂の新座のきくといふ者が名人であつたといつてゐる。

かういふ掛合咄の樣な、茶番の樣なをかしといふものが、筋を立てゝ多少劇的な仕科を演じたものが卽ち今日の所謂狂言である。それは恰も歌舞妓の猿若が獨立して猿若狂言となり、大坂俄が遂に芝居で興行する樣になつたのと同じ筋道である。これを信の能に對して狂言の能といつた。此の狂言の能は何時頃から出來てゐたか明ではないが、世阿彌の頃には既にあつたので、世阿彌は當時の神事能、勸進能には信の能の猿樂三番、狂言二番、已上五番が普通であるといつてゐる。看聞御記によると、御香宮の猿樂に能一番の後狂言があつて、其の後雨が降つた爲めに中止したことが見えてゐる。卽ち其の頃から今日の樣に狂言を能の間に入組んで演じてゐた習慣があつたのである。

狂言の曲目の最も早く物に見えてゐるのは寛正五年の糺河原勸進猿樂日記であつて、それには曲目二十四の內、狂言記等にあつて、普通に知られてゐるものが十六番もある。其の他名稱の相違して居つて內容の同じものもあるかも知れないから、今日行はれてゐる狂言の大部分は能樂の隆盛期には既に出來てゐたと見て大過がないであらうと思はれる。併し狂言は舞踊ではなく、其詞章は謠物ではない。曲節の拘束を受けないから、其の詞章には相當に流動性が

あり、時代と共に內容にも多少の改變があり、詞の上にも亦變遷があるであらう。狂言の詞は普通には寬文年間版の狂言記が最も早いもので、五卷で五十番の狂言を收めてゐる。元祿十二年には其の狂言記の他に續狂言記五卷、拾遺狂言記五卷が出で、翌年又狂言記外五卷が出たので、二十卷で計二百番の狂言が出版せられた。狂言は此の他にもなほ五六十番あつて總計二百五六十番に上るであらう。狂言には大藏流、鷺流、和泉流の三流があり、大藏流は最も古く、和泉流は新しい流派である。そして狂言記は和泉流のものであるが、大藏流にも鷺流にもこれより早く狂言の詞を記錄したものはない。刊本の狂言記は和泉流のものでないといふ說もあるが、狂言の詞は不斷に流動してゐるから、後世舞臺に於いて演ぜらるゝ狂言の詞や、後の記錄によつて狂言記を批評するのは信用出來ない。そして狂言記によつて其の內容を調査すると、永正年間に出來た、犬筑波集の句が「富士松」の中に見え、又鐵炮の事が「文藏」や「枕物狂」等其の他に多く見えてゐるが、鐵炮が近畿地方に盛に用ひられる樣になつたのは元龜、天正頃の事で、「胸つき」「八句連歌」「子盜人」等、其の他に多く銀子使用の事が見えてゐるが、銀が通貨となつて世上に行はれ出したのは、天正以後の事であり、又「薩摩守」には四天王寺を大坂天王寺といつてゐるが、天王寺が大坂の內、或は大坂の傍と思はれる樣になつたのは德川時代の事である。されば狂言は大略能樂の隆盛時代には既に出來てゐたらうと思はれるが、其の詞章には多少の變遷があつて、現在の狂言をそのまゝ室町時代盛時のものと見るのは危險である。近時狂言の詞を以て室町時代の風俗及び言語の史料として賞用してゐるが、これには多少の用心が肝要である。

一〇 曲舞

曲舞(くせまひ)も猿樂の能と相前後して、鎌倉時代の末か南北朝時代に行はれ始めた一種の舞踊であつて、能樂と同じく舞臺舞踊である。觀阿彌が猿樂革新に努力してゐた時、白髭の能に始めて曲舞の節を取入れて、非常に見所の賞讃を博したといふ事である。これより猿樂に曲舞を取入れる事が多く行はれて、大いに世の好尚に投じる事となつた。謠曲の中にクセといふ部分のあるのは卽ち此の曲舞の節を取つた所で、而も最も重く見られてゐる所である。謠曲二百番の中に過半までクセといふ部分があり、クセの無いのは僅に六十番ばかりである。後には此のクセの部分だけを獨立せしめ、又は其の部分だけの短い詞章を新作して、それを曲舞とも闌曲ともいつて謠つた。闌曲といふのは闌(た)けたる卽ち丈(たけ)のある曲といふ事で、以てクセが謠曲の中に於いて非常に重要視せられてゐる事が知られる。されば曲舞の謠の音樂的價値が從つて高いものであつたことが推察せられるのである。

觀阿彌時代の曲舞といふものゝ樣子は、謠曲を通して、或は世阿彌の書いて置いたものによつて纔に知らるゝのみであつて、其の委しい事は殆ど知られてゐない。世阿彌はくせ舞は次第にて舞そめて、次第にてとむる也といつてゐるが、それを謠曲について見ると、山姥の能の中に見えてゐる曲舞の詞は「よし足曳の山姥が、山巡りするぞ苦しき」といふ次第に始まり、同じ文句の次第に終つてゐる。百萬の能の曲舞も亦「親子あふむの花の袖なれや、百萬が舞を見給へ」といふ次第に始まり、同じ文句の次第に終つてゐる。かういふのが曲舞の詞に共通の形式であつたのであら

う。謠曲の中のクセといふのは、唯曲舞の節といふ事で、其の部分の詞章は少しも曲舞の文句を借りたものではないが、山姥の能は山姥といふ遊女が曲舞を舞ふ事を作り、百萬の能も亦百萬といふ遊女が曲舞を舞つた事で、そこに引かれてゐる山姥なり、百萬なりが謠つた詞章は、よしそれが能作者觀阿彌及び禪竹の作つたものであつても、少くも曲舞の詞として作つたのであるから、曲舞風であつたらう。それによれば、當時の曲舞の詞は優美な律語であつた。そして山姥や百萬の能によつても察せられる通り、遊女がそれを謠ひながら舞つたのであらう。恐らく鎌倉時代にあつた白拍子の舞といふものと同じ系統のものであつたらうと思ふ。

然るに、かく謠曲や世阿彌の遺著の中に見えてゐる曲舞といふものと、當時の記錄に見えてゐる曲舞といふものとは多少樣子が相違してゐる樣に見える。記錄の上では曲舞の事が康永或は觀應の頃から見えてゐるが、應永の末頃からは屢物に見える。滿濟准后日記によると、應永三十四年五月醍醐妙法院で舞つた曲舞は攝津能勢の聲聞の兒であるといふ。聲聞は又唱門師ともいひ、非人の徒である。彼等は勸進曲舞を興行してゐるのであるが、年頭には權門勢家へ參つて千秋萬歲の言立をする。そして萬歲の濟んだ後に自分達の家の藝である曲舞を兩三番舞ふのである。京都では北畠及び櫻町の聲聞の曲舞を舞ふ事が公家衆の日記に多く見えてゐる。又聲聞達は曲舞座を組織して勸進してゐたので、京都附近では山本、藤井、里村などゝいふ座の名が現はれてゐる。

德川時代には幸若舞といふものがあつて、越前の幸若氏が幕府に仕へ、每年一度江戶へ下つて舞を舞つた。其の舞の詞といふものが普通に舞の本といつて三十六番あり、古く印行せられてゐる。其の三十六番といふのは

大織冠　　滿仲　　志田　　百合若大臣

夜討曾我	十番切	富樫	笈さがし
高館	敦盛	景清	烏帽子折
八島	伏見常盤	文覺	鎌田
築島	新曲	和田酒盛	いづみが城
元服曾我	小袖曾我	四國落	常盤問答
堀川夜討	笛の巻	伊吹	硫黄が島
馬揃	未來記	木曾願書	那須の與一
濱出	入鹿	清しげ	腰越

で、此の内鎌田と和泉が城を除いて、夢合と劍讃歎を加へて三十六番にしたものがあり、或は流派によつては

日本記	禪賀	勝負分	鞍馬常盤
山中常盤	切兼曾我	籠破	

などを加へ、彼是增減して四十二番としたものもあり、なほ此の他に靜、張良などいふものもある。ところが記錄に見えてゐる曲舞の曲目は二十數番あり、大部分右に擧げたものと符合し、纔に二三番だけが右に見えないものがあるのみである。されば此の點から、此の時代に曲舞といつたものと、後に幸若の舞といつたものとは畢竟同じもので、幸若は曲舞の一座の名であつたらしく思はれる。果然記錄の內に香若（幸若）太夫が曲舞を舞ふとの記事が康富記寶德三年三月七日の條、政覺大僧正記長享二年七月二十六日の條等以下屢見えてゐるので、傍曲舞と幸若の舞とは同じ

ものであることが知られる。

曲舞の様子は記錄によると、普通の男の曲舞の他に手猿樂の樣に稚子や女房の曲舞があつた。男は直垂、大口、兒は水干、大口、立烏帽子、七十一番職人歌合に見えてゐる女曲舞も亦兒の如く立烏帽子を頂き、水干を著てゐる。此の點は白拍子の男舞といふものとの關係を思はせる。そして舞の本は散文の物語で、それに節をつけて謠ひながら、鼓拍子で舞ふのである。これには猿樂の能の樣な劇的な結構がないから、役に依つて特別の扮裝を用ひるといふ事もなく、又面を用ひない。又役によつて役者の替はる事もなく、唯一人で舞ふのである。時には同じ事を二人で舞ふ場合もあるが、それは特例で、相舞或は二人舞といつてゐる。

前にも述べた樣に、謠曲に見えてゐる曲舞といふものは、美しい律語であつたが、舞の本は全く散文で、且つ義經記や御伽草子を讀む樣な粗野な幼稚な文章である。粗野なものが後に美しく發達するといふ事はあるが、始め美しかつたものが、後になつて粗野になるといふ事は少し解し難い事で、謠曲などに見えてゐる曲舞といふものと、記錄などに記されてゐる曲舞といふものと、果して同じものであるかどうかは頗る疑問である。併し永正頃のものといはる七十一番職人歌合にある女曲舞の所にも、其の謠ひ物の一句と思はるゝ文句が見えてゐるが、それもやはり美しい律語である。されば曲舞の間には白拍子などから筋を引く美しい謠ひ物を謠つたのと、別に物語を語りながら舞ふ一派とが分れたものであらう。謠ひ物の流派といつても、敍情的な小唄などを謠つたのではなく、山姥、百萬などの他に在中將業平、法性坊僧正、大磯の虎などゝいふ物語めいたものである。舞の本は前に掲げた曲目によつても知らるゝ通り、多く源平盛衰記と曾我物語に材料を採つたものが多い。古い時代に材料を取つたものでは日本記、未來記、

入鹿等があり、大織冠は謠曲の海士と同じく、滿仲も仲光と同じ事を敍したものである。其の他張良でも、亦源平物でも、曾我物でも多く謠曲にあるもので、恐らく謠曲の影響を受けて作られたものであらう。たゞ百合若大臣は希臘のホーマーのオデッセーのユリウスの傳說を飜案したものだとの說があり、又新曲は中書王物語と同じく、太平記卷第十八尊良親王御息所の一段を殆ど其のまゝ取つたものである。

記錄の上では戰國時代、或は安土桃山時代に最も曲舞の記事に富んでゐるので、恐らく其の頃に隆盛を極めたのであらう。特に織田信長は幸若大夫を寵し、平生敦盛の「人間五十年、下天の内を比ぶれば、夢幻のごとくなり」の文句を好み、桶狹間に今川義元の旗下を襲ふ時も、これを謠つて出掛けたといふ。德川家康も亦幸若大夫を愛し、幸若彌次郎、同八郎九郎、同小次郎等を越前から駿府に呼寄せて舞はせたといふ。これより幸若座は幕府に召抱へられて、毎年一度江戶に登城して舞を演ずるのみとなり、それからは一般の世間の需めには應じなかつたといふ。元來曲舞は物語を語りつゝ立つて舞ふものであるが、それが能から謠だけが音曲といつて獨立して謠はるゝ様になり、後のものながら、竹本義太夫の人形淨瑠璃から淨瑠璃だけが獨立して演奏せられる様になるのと同じ理由で、曲舞も遂には舞はれないで、唯其の物語だけが謠はれる様な場合も生じた。これを居舞といひ、それに對して立つて舞ふのを仕形舞といふ。居舞は伴奏の樂器はなく、たゞ扇拍子のみで謠ふのである。そして幸若では毎年一度幕府に登城して祝言の様に型ばかり舞を奏する様になつて、遂に仕形舞を忘れてしまつて、居舞ばかりになつた。それ故或は幸若の舞は舞といふのは名ばかりで、本から舞が無かつたなどゝいふ說を立てる人もある。

幸若の家に對して、主として民間に行はれてゐたのは大頭といふ座である。大頭は山本氏であるが、其の他池淵と

か笠屋とかいふ曲舞座も後には皆大頭の配下になつてしまつた。笠屋といふのは女曲舞である。此の大頭の舞も元祿頃まで諸方を興行してゐたが、次第に衰微してまつた。其の座の多くは歌舞伎の方に合流して行つたのである。江戸の市村座の前身である桐座も、もとは桐大藏といふ女舞の座であつた。諸國に散在してゐる唱門師村は一般に舞々といはれ、土御門家の配下となつて陰陽師と稱してゐた。かくして民間の曲舞も亡びてしまひ、幕府の幸若の舞だけは形ばかりの命脈を保つてゐたが、それも維新以後斷絶してしまつた。今日九州の柳川在に大頭流の舞を傳へてゐる所があつて、近頃村の若衆達に教へて復興を圖つてゐる。

二 小唄

宴會、舞踊の唱歌、兒童の口遊む童謠、田植、臼挽、馬追等の勞働歌など、凡そ職業的な謠物以外の俗謠、民謠等の歌謠は、歌詞の長短にかゝはらず、當時はすべてこれを小唄といつてゐた。古典化せられた古い催馬樂、神樂歌、風俗及び職業化せられた中古の雜藝は姑く措き、古代に於いてはかういふ俗謠、民謠の類は、非常に輕視せられて、一般に記錄せられる事が稀であつた。此の時代の小唄類も軍記物、物語、御伽草子、狂言、謠曲等の中に散見するのであつて、伴信友の中古雜唱集、栗田寛の古謠集の中に、さういふものが多少收められてゐる。

宴會の席で、色々小唄の類の謠はるゝ事はいふまでもないが、當時宴席ではよく巡の舞といふ事が行はれた。これは其の席にゐる人が巡次に舞ふのであるが、それには大黑、地藏、小人、鶉、狸、猿などになつて舞ふ大黑舞、地藏

舞、小人舞などいふのがあつたことが諸書に多く見えてゐる。其の舞の唱歌は「大黒舞を見さいな……」「鶉を見さいな……」といふ風に大黒天や鶉の事を歌つた謠であり、其の內大黒舞は大道藝人の手に落ちて、德川時代まで、非人の徒が、大黒天の面を著けて門付けに歩いたことは人によく知られてゐる所である。又近世の童謠にある數へ歌、物は盡し即ち子供達が「一つとや云々」と數へて謠ふ歌や、「赤いものは何々」と囃す歌なども已に當代の御伽草子の內に見えてゐる。祭禮、雨乞、疫神祭等の戶外に於ける群集の舞踊は、何時の時代にもある事で、此の時代にも勿論行はれてゐる。當代の始め頃には每年正月に松囃といふ踊が行はれ、盆の念佛踊も又此の時代の中頃から物に見えてゐる。當代の踊は多く風流の花傘とか、風流の一ツ物とかいふものを中心にして踊つたので、それで遂に踊の事をも風流といつた。風流といふのは特殊の意匠をめぐらした裝飾をいふので、風流の花傘は唐笠の上に秋の野や洲濱などの造り物を取り付けたもので、一ツ物といふのは或は大黒、或は唐人又は滑稽なのは妊み女などに假裝して出るのである。さういふ風流を中心にして、二重にも三重にも圓く輪を造つて取卷く、その連衆を蹈衆といひ、中にあつて踊るのを踊衆、輪の中心に風流と一所に踊るのを中踊といひ、そして歌上げといふ音頭取が一人か二人あり、その音頭につれて唱歌を歌ひつゝ踊るのである。其の唱歌は狂言などに見えてゐる。狂言の若菜にある。

木買はう〳〵、小原木召され候へ、小原靜原芹生の里、朧の淸水に、影は八瀨の里人、知られぬ梅の匂ふや、此の藪里の春風に、松が咲き散る花までも、雪は殘りて春寒し、小原木召されよ、小原木召され候へ、

といふ小唄は、それと大體同じものが、他の戰記物の風流の記事の內にも見えてゐるので、恐らくよく謠はれた唱歌なのであらう。三條西實隆が踊の小唄二十首を書いて遣つたことが其の日記に見え、山科言繼も人から賴まれて、「數

奇の茶」「鷹野」「はねをどり」「松の名所」「色のをどり」等の唱歌を作つて遣つたことを其の日記に記してゐる。踊には伊勢踊、兵庫踊、女踊等の名があつたが、亦それ〲の唱歌があつたのであらう。念佛踊、やゝ子踊等を踊つた御國歌舞妓は、かういふ踊が興行化したものである。

俗謠や民謠などは、唱歌の節まはしなどに巧拙といふ事が自ら免れ得ない事であるから、上手な者が歡迎せられて、次第に職業化して、遂に專門の藝人の手に移される事となる。此の時代に於いて小唄を謠つた藝人には、鎌倉時代以降謠はれて來た宴曲卽ち早歌を謠ふ早歌うたひといふものがあり、又田樂、猿樂、盲法師等が尺八などに合せて小唄を謠つた。かういふ小唄うたひの中から後になつて隆達や弄齋の樣な名人が出たのである。かく小唄が職業化するに及んで、其の歌詞を記錄する事が始められる。當代の小唄を收錄したものに閑吟集といふものがあり、又最近笹野堅氏によつて、無名の小唄集が發表せられた。閑吟集には永正戊寅卽ち十五年の序があり、大永八年書寫の奧書がある。序に「あるは早歌、あるは僧侶佳句を吟ずる廊下のこゑ、田樂、近江、大和ぶしになり行數々を」毛詩の三百餘篇に准へて、約三百首の小唄を收錄したとある。笹野氏の小唄集は宗安といふ小唄うたひの需によつて久我敦通が記したものであるが、奧書には有庵三休といふ敦通の法號を記してゐるから慶長以後のものであらう。內容は二百十九首の小唄が收められ、中に閑吟集と同じものが三十一首あるから、恐らく此の時代に謠はれたものも澤山あるのであらう。閑吟集には序文にもある樣に、早歌卽ち宴曲、田樂の能、猿樂の能の謠の中、世人の口に慣れた一節もあり、或は僧侶佳句を吟ずるといふのは、朗詠の樣に、五山の僧侶などが詩の句を朗吟したもので、例へば

只吟可臥梅花月、　成佛生天惣是虛、

春風細軟なり西施の美、

などいふ類である。其の他民謠から來たものも恐らく多からう。田樂、近江、大和ぶしといふのは、田樂の謠の節、近江猿樂風の謠ひ方、大和猿樂の謠ふ風をいふので、これは田樂や猿樂が小唄を謠つたからである。集中の小唄には勿論戀の唄は多いのだけれども、又

あらうつくしのねりつぼ笠や、これこそかわち陣みやげ云々、

なにともなやなふ〳〵、うき世は風波の一葉よ、

夢幻や南無三寶、

なにせうぞくすんで、一期は夢よたゞ狂人、

人買舟は沖をこぐとても、賣らるゝ身をたゞ、靜に漕よ船頭殿、

など、流石に民衆の聲であつて、時代相を反映したものも亦少くない。

昭和九年九月一日印刷
昭和九年九月五日發行

岩波講座 日本歴史 第十二回配本 五

編輯者 國史研究會同人代表 黑板勝美
東京市神田區一ツ橋通
印刷兼發行者 岩波茂雄
東京市神田區美土代町
印刷所 三秀舍

寺島製本